

明治三十六年六月十八日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第參拾五號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第叁拾五號目次

論 說

人心の疑惑

西田幾多郎

一部生諸氏に檄す

慷慨悲憤之助

井上博士の「青年と宗教心」を讀む

鴨 水

社會的制裁

北川 散士

雜 錄

培養植物の原產地並に始作年代市 村 塘

我郷と人物

冠 木 劍 狂

暑中休暇

露 波

文 苑

月物語 (Bilderbuch ohne Bilder) 紫

影

附 錄

羽咋一泊行軍記事

第七回 春季水上大運動會記事

端艇命名式及艇庫落成式記事

悶えの鶯

信吾田中翁碑銘 代緒方某

慶櫻村尋常小學校新築序

磯の夕暮

わらべの歌

病める人に

梅 村

村 上 函 峯

櫻 陵 散 人

秋 風

三 郎

雨 聲

雜 報

本校紀念日記事、弓術部春季大會、圖書館雜感、

千把一束

北辰會雜誌第叁拾五號

論 說

人心の疑惑

西田幾多郎

此頃の様な春の日であつてみれば、野は一面の緑となり所々に名も知らぬ小さき花が咲き揃ひ、晝はこりきんだ雲雀が青空をけつて囀づるのも爽快であるが、夕に隱なるなつかしい月がぼんやりと山の端にかゝつて居るのは何とも云はれぬ景色である、我等は此の美しき天地に棲息して外には親しき友達の會合もあり内には家族團樂の樂もある、毎日定りたる業務を繰り返して起きる働く食ふ寝る、かくの如く六十七十の星霜を消し盡して齒落ち眼かすみ遂に茶毘一片の煙と化し去るのである、我等の祖先もかくの如くであつた我等の子孫もかくの如くであろう、昔より天地はかくの如き者と分つて居り人生はかくすべき者と定つて居る、かくの如く考へて見れば天地人生も極めて明了なる者であり愉快なる者であつて何の疑惑も不平もない筈であるが、唯此の反省的なる人心の奥底にはかくの如くに信じかくの如くに樂んで死するを許さぬ所の者がある、今日は物質の學問が日に精細に赴くので、何と云ふ星は何年何月何時何分何秒に見えるとちやんと計算ができ、電氣や光線の波の長さまでが分つて居る、智識の發達も實に驚くべき者で、かくして見れば天地の現象一々明白で何一つ不思議なものがない様であるが、思を潜めて深く考へて

みれば何一つ不思議ならざる者がないのである、雷電はイレクトリシティーでありイレクトリシティーはイーサーの振動であると説明した所で、さて其イーサーとは何であらうか畢竟Xを以てXを説明したまでもある、元來我等の智識は若干の假定を許して而して後成立する者で、その根本的假定と云ふ者が人心に對して有する權威は、唯我等はかく考へねばならぬ他人も皆かく考へる我等はかく考へて不都合がなかつたと云ふまでのことである、かくの如き假定の上に立つ智識が果して人心に満足と慰安とを與へ得るものであらうか、又人生に就いて考へて見ても社會には習慣があり法律があり道徳があつて、人間が此の世に於て爲すべき事爲すべからざる事か明白に定つて居り、之によりて行ひさいすれば無事一生を送る事はできるのであるが、さて深く自己の心に反省して見れば、人は何故にかく爲さねばならぬのであるか、善は何故に善であつて惡は何故に惡であるか、此等の根本的疑問に就いて明確なる考を有する人は千百人中一人もなからう、平常無事の時には何事も分つた様で容易なる様であるが、一旦不慮の不幸に際會し實地に此身此心を苦める時には心底に潜伏せる疑問は蜂の如くに起りて忽ち暗澹たる疑惑の深坑に陥らぬ者はないのである、さればとてエビキュリヤンに倣ふて快樂が人生の最大目的であると觀じ、何んでも此世の快樂に耽つてそれで人心の満足と安慰とを得ることができものであるか、無意義の快樂を繰り返すのは却つて人心に倦怠と疑惑とを増すのみである、人間は神にもなれずさりとて惡魔となりて満足することも出來ず、つまり五里霧中に彷徨する哀れなる生物である、

昔アングロ、サキソンの或る王が暗澹たる冬の日、高僧と人生の話をして居た所へ、忽ち一羽の

小鳥が一方の窓より飛び來りて一方の窓へ逃れ去つた、高僧は之を見て人生も此の如きものだ云つたといふ話がある、生は何處より來り死は何處へ去るのであるか、人は何の爲に生き何の爲に働き何の爲に死するのであるか、これが最大最深なる人心の疑惑である、希臘や印度の昔より三千年後の今日に至るまで常に新なる疑問である、人は分らぬ事も習慣となれば當然の事と思ひ、當然の事は遂にはかくなけねばならぬ事となるのであるが、極めて落ちついた極めて透明なる心より考へて見ると此天地人生程不可思議なる者はないのである、人生得意の時と雖も一たび此の疑惑に遇着せば一帶の愁雲忽ち此心に蔽ふて煩悶苦惱に堪へないのである、此の疑惑は實にこれ我等が深き心の病であつて、美しき花の心を食ふ蟲の如くに無邪氣なる人心の平和と愉快とを奪ひ去るのである、さりながら人が此世に生れ苟且愉快の心を以て世はかくの如き者と濟し風を見て帆を使ふ考なればともかく、苟もこの天地人生に就いて眞面目に考察し眞面目に此の一生を用ゐんと欲せば、是非一度右の疑問に到着せねばならぬのである、釋迦は此の問題の爲に王位の貴を棄て骨肉の愛を割いて雪山に六年枯坐したのである、ルーテルは此の問題の爲に寺院に閉ぢ籠つて狂人の如く祈禱したのである、雷に宗教家のみでなく學者でも詩人でも若しくは英雄豪傑でも眞面目に考へ眞面目に行ふた人は必ず此の問題に苦んだのである、近頃世間に持て囃すニ―チエーやゴルキーやの如きは偏狹であり破壊的であつて未熟なる青年の讀むべき者ではないが沈痛なる人生の疑惑憤懣を顯したものととしては同情の涙をそそがざるを得ないのである、右の如き疑を抱くのはあまりに懷疑的でありあまりに破壊的であるかも知らぬが、我等は單に疑

ふ爲に疑ふのではなく破壊の爲に破壊するのではなくて、深く疑ふのは深き解決を求めるのであり強く破壊するのは固く建設する爲である、疑つて解くを求めざるは勇氣がないので壊つて建つるを求めざるは至誠に乏しいのである、かくの如き疑惑は寧ろ無い方がよい、我等の疑惑は渴せる者の水を求め迷へる子の親を慕ふが如くに眞摯なる者でなくてはならぬ、所謂常識より見ればかくの如き疑問はあまりに深遠でありあまりに偏狭であり、哲學や宗教やの専門家が討究すべき閑人の閑事業にして一般の人は此の如き問題を考ふるの必要なく、又之ありとするも之を討究する暇がない者の様に思はれるかも知れぬか、我が所謂人心の疑惑と云ふのは智識的要求に本づく哲學的問題ではなくて、我等が情意の上に於て天地人生に對する關係を定めんとする實地の要求より來るのである、我等が悲む喜ぶ欲する求むる此等の事實の上に於て血と涙とを以て決すべき生命の問題である、

世の中には終日衣食の爲に奔走し單に物質的存在の爲に汲々として一生を没し去る者が幾億萬人あるかも知れぬ、此等の哀なる人々は如何に生くべきかと考ふる餘裕もなくして一生唯生くる爲に生きたのである、此の如き世の中で人生の價值を論ずるなどは甚だ贅澤なる者であるかも知れぬが、この物質的生命といふものが左程に大切なる者であらうか、心を苦め身を役して五十年の飲食をつゞけ其結果は焼いて棄つべき臭肉を何十年が維持しまた子孫を遺したるまでであつて、而して其子孫は亦同じ無意義の生活を繰り返すものとすれば、何んど之より馬鹿らしき事はあらうか、かくの如き生命は寧ろ早く打殺して茫々の中に投じ去る方がいかに爽快であるかも知れぬ、

人間は牛馬の事を笑ふが我等も無意義の性慾の爲に驅使せられて終生役々たるのは、鼻端に繩を付けられて引き廻はされる牛馬とあまり違はぬ様である、或は又遠き人生問題を考ふよりは我等には近き仕事があり近き義務があると云ふ人があつて、これも一應至當の言であるか、人生と云ふ者を離れて爲すべき事業があり盡くすべき義務があるものであらうか、生命なき事業はヴァニチーであり生命なき道德は偽善である、太陽と眞理とには人は正面より之に向ふを欲せず、姑息なる人心は色々の口實を以て眞摯なる人生問題を避けんとするのである、人生問題とは我等の日常より離れたる迂遠の研究ではなく、我等が日常食ふ上寝る上起きる上愛する上怒る上に於て直に此の心に就いて天地の關係を求め神の心を求め解脱の境界を求めんとする極めて實地に適切な研究である、この研究には學問も才藝も要せず唯純白なる眞心を以て直に之を研究するのである、基督の教を傳へたるペーターはガリラヤの漁夫であつて達磨の法を揚げたる惠能は一文不知の樵夫であつた、

此の人生の疑惑を決するに當つて直に我等の心を苦むる者は、我等の力が果してかくの如き疑惑を解決し得る者であらうか又いかにして之を解決すべきかの問題である、人生の疑惑を抱きながらも此の問題の爲に迷ふて居る者が幾人あるかも知れぬ、此時に當つて我等の求むべき者は實に釋迦や基督やの如き心靈的偉人であつて、此等の人の心靈的經驗は地球の兩極が磁石を引くが如く、我等の心を引き迷ふ心に希望を與へ病める心に勇氣を與ふるのである、我等は此等の偉人の感化に浴し此等の人の教を信じ之に由りて我等が心の深き疑惑を解決せんとするのである、此等

の人は實に暗夜の燈明臺である、若し此等の人がなかつたならば人生は如何につまらぬ者であらうか、

(完)

歌人としての和泉式部 (承前)

八 波 則 吉

第二 内容の装飾

同じく思想を顯はすにも、或は比較法を用ゐる或は擬人法に由る等、脩辭上の注意如何に従て一層明晰に且つ切實に其意を通じ其情を感ぜしむるを得るは、今更こゝに云はずもあらん。予は只簡單に、式部が如何に此事を解し此法を適要せしかを述べんとす

一 譬喩法

譬喩に直喩と隱喩との別あり。「浮世は夢の如し」といふは直喩にして、「夢の浮世」といへば隱喩となる。概して前者は短歌に尠く、式部も主に後者を用ゐる。すなはち

あきはて、今はと枯る、淺茅生は、人の心に似たるものかな

の如きは集中稀に見る前者の例にして

春や來る花や咲くとも知らざりき、谷の底なる埋れ木の身は
聲きけば暑さぞまざる蟬の羽の、うきす衣は身に着たれども

の如き後者の例は此外なほ甚だ多かり。かの無常の歌と稱すべき佛教思想より出でたる歌の十中八九は則ち此種の譬喩法に由りたるものにして、前に掲げし「たゞ宵の間の夢の世に」「風の前な

る宵の燈火」などの外、人生を「みやまべの霞」に譬へ、「浮舟の又漕ぎ離れ」行くに比したるものあり。觀身岸額離根草、論命江頭不繫船てふ意を詠める四十三首、及び我不愛身命、いはほの中に住まばなどの文字を一字づつ頭に据ゑて悲的に見たる浮世の歌等、苟も譬喩法を用ゐたるものは直喩にあらずして皆悉く隱喩の例なり。其他白露を玉と見、曇りなき月を塵も居ぬ鏡と思ふ如きは、万葉以來陳腐の想にて殆んど云ふにも足らざるべし

二 比較法

梅と櫻との優劣を

櫻より色はさこそは深からめ、香さへ異なり紅の梅

覺ゆぬ事ども聞えし頃

春の日のうらく見れど吾ばかり、濡衣きたるあまのなき哉
竹の葉に露を置きたる様を畫ける扇を忘れたる男に

しのゝめにかきて別れし人よりは、久しくとまる竹の葉の露

世のはかなくて

白露も夢も此世も幻も、たとへていへば久しかりけり

等は式部か集中見るべきものなり。比較の中にも

花散らす春の嵐は秋風の、身にしむよりも、佗しかりけり

の如く似寄りたるもの二個を並べて其甲乙を論ぜんよりは、善と惡、白と黒との如く全く相反せ

るものを對照せしむれば一層其の効を大ならしむ。之を反照。もしくは對比と稱して美學上甚だ尊重する思想表顯の法式なりとす、式部また時に其法を用ゐき。たとへば

願くは暗き此世のやみを出で、明き蓮の身ともならばや

又櫻の花の待ち遠なりとて

暮るゝ間も知らぬ命にかへつゝも、遅く櫻の花をこそ見め

後者の如きは蓋し對比の上乗なるものか。袋草紙に性空の歌とて

千歳ふる松だにくゆる世の中に、けふとも知らで立てる吾かな

の一首あり、これまた此種の適例にて、而かも上人は式部と因縁淺からざれば、筆の序に茲に出

三 誇大法

白髮三千丈緣愁似個長、これ李白秋浦の咏にあらずや。力拔山兮氣蓋世、これ項羽垓下の吟にあらずや。由來支那文學は突飛の形容を以て異色ありとす。試に見よ、搏虎屠龍と云ひ或は掀天動地と云ふ、慣用の久しき、今日殆んど平事の如きも能く々々其字義を檢し來れば實に驚くべき偉大の形容に非ずや。鼎を上ぐるものすら古來稀なり、孟賁北宮黝にあらざるよりは誰か猛虎を搏ち飛龍を屠るものぞ。況んや天を震はし地を揺り孟軻の所謂「泰山を挾んで北海を越ゆる」者天下果して何處にかある、これ誠に爲ざるにあらで能はざる也。しかも其到底行ふべからず、又實際あり得べからざるものを提け來つて一種文學上の裝具となすや、其文動き其詩靈ありて讀者を

して手の舞ひ足の踏む所を知らざらしむ。之を是れ誇大法と云ふ。誇大法は實に漢文唐詩の神髓たるなり。然り而して、人種の同じき故か、はた彼れの影響に由れるものか、我國の文學にも此種の裝飾甚だ多く吾人往々快哉を三呼する事あり。中にも古事記の

かれ高天原ゆすりて八百萬神共に咲ひき

其蛇を切りはふり玉ひしかば肥の河血になりて流れき

など何等痛快の文字ぞ。かくの如く我聞く、佛典また之に類して、普佛世界六種震動の如き形容ありとか。盡し誇大法は東洋文學の特色とも云ふべし。(勿論泰西にも其例數多ありといへども東洋諸國のそれに比すれば殆んど同日の談にあらずめり)

さて誇大法を短歌の上に應用せるは、まづ柿本朝臣人麿

久方の天ゆく月をつなになし、我大君はきぬがさにせり

如何に規模の大なるぞや、又古今集讀人不知

秋萩のうらびれ居れば足引の、山下ごよみ鹿の鳴くらむ

頗る愉快なる形容ならずや。この外万葉以後の諸集より此種の和歌を撰取せば興味甚だ多かるべけれど、他人の作は姑く措き、和泉式部が所詠にも

飽かざりし君を忘れん物なれや、ありなれ川の石は盡くとも

忘草われかく摘めば住吉の、岸の所は荒れやしぬらん

朝毎に氷どちつる我袖は、誰が堀り置ける池ならなくに
の如き随分壯快なるものあり、就中最も驚くべきは涙の形容なり。見よ

つく／＼とふるは涙の雨なるを、春のものとや人の見るらん

雨に比し霞に比するを尙ほ不足なりとなすか。然らば聞け

身よりかく涙はいかゞ流るべき、海てふ海は潮や干ぬらん

渺茫際なき大海の潮流、悉く去つて式部が涙と化せん。豈に大膽不敵の言にあらずや。由來、我國の文學中特に形容の大袈裟なるは滴々落つる涙のそれなり。古事記には素尊の泣き給ひし狀を「青山を枯山なす泣き枯し河海は悉に泣き乾しき」とあり。式部が「海てふ海」の譬喩もいづれかゝる所より出でたるならんが兎に角驚嘆すべきにあらずや。而して「涙河」涙の雨等、古今以來の例に倣ひて徳川時代の淨瑠璃には殆んど滑稽に近き奇觀を呈するに至れり。例へば艷容女舞衣酒屋の段には

親は外面に血の涙…………一度にわつと涌き出る涙には江いづみ川小きん汲み出す如くなり

とあり、流石勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の闇、輪廻の繼に締めつけられて、繪本太閤記尼が崎の段にては

堪へかねてはら／＼雨か涙の汐境浪立ち騒ぐ如く

に泣きぬ。泪の限り片岡も、腸を斷つ四苦八苦、五臓を絞つて恩愛の

涙しのつく春雨に、淀の川瀬の浪立て堤を穿つ如く也

と賢女鑑の作者は語れり。是等は寧ろ過ぎたりといはんか。要するに誇大法は諧謔喜劇などには最も有功ならんも、悲劇もしくは眞面目を要する場合には少しく斟酌せざれば却て失笑を招くに至らん。(淨瑠璃を讀み又は義太夫を聞きてかゝる所に會する毎に一種異様の感を起すは蓋し予のみに非ざるべし)因に記す、賀の歌には如何なる廣大誇張の形容を用ゐるも概して妨なきが如し。何となれば元來無限遠大を詔ふものは賀の歌の本性なれば也

さて誇大法の全く反對なるものを貶小法といふ。棒大を針小にする法にして例へば大海を盆池に比し須彌を芥子に比するが如し。賴山陽が天草夜泊の詩後に題して平安斗大といへる、或は京の東山を蒲團着て寝たる姿と歌へる、いつれもこの例なり。式部は自身を謙遜して、谷の底なる埋れ木なればといへることあり。又老後人世の俗塵を厭うて

なぞやこは石や岩ほの身ともがな、浮世の中を歎かでも經ん

といへることあり。是等を貶小の例ともすべきか。この外別に見るべき程のものもなければ畧しつ。次に

四 擬人法

に就て少しく語らん。プレーア氏の脩辭學講義に云く、「擬人法は特に多く東洋の文學者に用ゐらるゝが如し、何となれば彼等文明の程度到底吾等西洋人に及ばざればなり云々」と。理由は兎まれ實際に於て或は此の言當れるならんか。つら／＼吾國古來の和歌を見るに、彼等やさしき文學

者は雁の鳴くにも花の散るにも、山川草木禽獸魚介、生あるものも生なきものも、甚たしきは無形のものすら己と同じ心の友とし、或は呼びかけ或は問ひかけ、慰藉し又は懇願したりき。見よ古今集春の部に

鶯の氷れる泪、春の着る霞の衣、花散らす春の宿、香をだにぬすめ春の山風、香をだに残せ梅の花、春雨のふるは涙か櫻花、いざ櫻われも散りなん、吹く風を鳴きて怨みよ鶯は、藤の花逼ひまつはれよ、山吹はあやなく咲きそ、鶯も果は物憂くなりぬべら也、鳴けよ鶯

等の擬人あり、以て其一班を知るに足らずや。然り而して和歌に用ゐられたる是等擬人の始祖とも云ふべきは古事記中巻の日本武尊の詠「一つ松あせを」にして、人麿盛に應用し、遂にかの有名なる「妹が門見ん靡け此の山」の快極まる警句を出しぬ。かくて平安朝に至りて如上の盛況となり、古今集時代最も好んで待遇せられき。寛弘時代も固より歓迎せられたれども大勢より移せば稍く減少しつつありしに似たり。和泉式部は就中この種の適例に乏しく、

何事も心にとめて忍ふるに、いかで涙のまづ知りにつけん

鳴く虫の一つ聲にも聞えぬは、心々にものや悲しき

等を比較的斬新なるものとす。この外松に問は、や、いかなる色の風等あれども、靡け此の山、香をだにぬすめ春の山風などに比すべくもあらず、只

いづれともわかれざりけり春の夜の、月こそ花の匂ふなりけれ

及び

空見れば雨も降らぬに音するは、只月のもる雫なりけり

の如きは、嚴密なる意味に於ての擬人ならねど頗る趣味ある秀句を含み、且つは此種の和歌に似たれば便宜を以て茲に出しつ

この外諷喻、相換、頓呼、反語等一々項を分ち例を連ねて觀察せば興味なほ多かるべしといへども、かくては此の文甚だ浩瀚に互り、加ふるに主人公たる式部が集には其例間々缺乏すべければ勢ひ之を他人に求め、遂には主客轉倒する恐れあれば、愛を割いて他日に譲りぬ。若くは和歌全

身の脩辭を論する好機あらんか

之を要するに式部は脩辭上内外共に諸種の法式を用ゐたりきといへども、そは人麿貫之等の如く想を凝らし詞を練りて巧に繪畫的粉裝をなせるにあらず、寧ろ淡々水の如く詞泉の涌出に従ひ口に任せて云ひ放ちたる中に、天與の詩才のつから發揮し、紫式部のいはゆる「はかなき詞のにほひ」も出で、又「をかしきひとふし、目とまる所」もよみ添へ、期せずして脩辭の法則にも叶ひたるが如し。こゝに於てかますく知る、歌人としての和泉式部は、万葉ならば赤人、古今ならば躬恒に似たるを。赤人は人麿が下にたいんことかたう、躬恒をば、な、あなづらせ給ひそ。

(次號完結)

一部生諸氏に檄す

慷慨悲憤之助

近時世潮の混濁に赴くに從ひ、學生の風紀漸く亂れて不倫の徒頻りに生じ、學生の最も貴ぶべく而かも其本領たる意氣なるものに至つては、今や殆んど索むべからざるの窮狀に陥り、志士をして轉た國家の前途を憂ひしむるに至れり、先きに予輩も聊か此に慨するありて自ら好まざるの辯を弄し、至らざるの禿筆を驅つて、或は校風振起策を説き、或は學生の本領を論して警告勸誘稍勉めたりしを以て、他日に見るべきもの尠ならずしとなせしに、何ぞ圖らん一部生諸氏が今日の如く意氣なく活動なく淫靡柔弱恰も婦女子の亞流ならんとは、看よ他の部が一致共同の美風盛にして互に人後に落ちざらんことを期するを、特に二部の如きに至つては元氣旺盛にして嶄然頭角を現はし常に運動會裡の覇權を握れる所以のもの觀し來らば、一部たるもの豈に慙視羞耻の極ならざらんや、予輩は今回の短艇競漕に於て一部の元氣甚た消沈して而かも賤劣なる手段に出てしを見て、慷慨悲憤禁せんと欲して禁する能はざるものあり以て一部の諸氏に檄せんと欲する所以なり、

學生元氣の磅礴する所、各種の方面に向つて發展すと雖、運動場裡に現はるゝもの最も顯著にして而して秋季陸上運動大會及び春季短艇競漕に在つてはその尤なるものなり、一部が多年二部のために制肘せられ來りし陸上運動會に於ける分野に就ては今更言はずもがな。昨春の短艇競漕會に於ては偶然の事情よりして徒らに最劣者たる三部をして漁夫の利を得せしめ、再昨年に於ても同

しく三部をして昨春に等しきの利を得せしめ、吾校競漕場裡の兩雄未だ曾て堂々輸贏を決したるなかりしは我人共に遺憾とせし所たり、而して昨春の事に至つて聊か二部の行動に對して非難の聲なきにあらざりしと雖、元氣充溢の餘事彼れに出でしものにして多少恕すべきの事なしとせず、當時彼等の活氣勃々たりしは到底一部の企及し得べき所にあらざりしは明かなりしなり、是を以て彼等は餘勇綿々猶ほ未だ盡きざるものあり、本春更に勇を鼓し一舉して競漕場裡の牛耳を握らんとし、二部專任の教授を初めとし部生悉く一致團結して撰手を激勵して敢て後顧の憂なからしめ、撰手は其後援の厚きに感して熱誠事に從へ線艇練漕既に旬餘日に及び、必勝を期して意氣頗る昂れり、三部も亦之れに應じて起ち新進氣鋭の士を挙げ、居を大野に卜して宿泊し日夜鍛練大に努め、苟かに一部の起たざるを奇とせり、然るに此時に於ける一部の内情は如何、集會又集會協議再三にして確定すること能はず、其間空しく小田原評定に時日を曠ふること十有余日、遂に其任に當るものなく意氣地なくも本年撰手を出さず全然撰手競漕を廢滅すべきを主張す、是に於てか二部三部の驚愕言はん方なく、人皆一部の精神的に敵愾心の消耗せるを冷笑せざるものなし、當局の士は之れを聞いて密かに昨年の舊怨に出でしにあらざるなきかを憂ひ、百万輪旋して仲裁勸誘甚た勉めたりしと雖、意氣なく結合心なき柔弱淫靡の一部生、固より舊怨を思ふが如きの概あるなく、唯徒らに學程の匆忙到底短艇競漕と一致兩立せざるを口實として之を拒みしが如きも、而かも其間自ら勝敗の數明かなるものありて存せしや疑を容れざるなり、故を以て此等仲裁勸誘の士に對しては一辭の此に答ふべき恰好の理由を見出す能はず、遂に赧顏冷汗一時を糊塗せるに

過ぎざるの醜態を演出せり、而して彼等が口實の主力とせる學程の匆忙といふが如きは一も其理由となすに足らず、試に他部の學程と比せんか、三部は或は伯冲の間に在りと雖、二部の如きに至つては却て更に繁なるものあるなり、學程の事實はそれ斯くの如し、斯くの如くにして而かも二部三部は驟然起つて雌雄を決せんとし、一部は獨り之れより脱退して撰手競漕を廢滅せんと計る誰れか、一部生の意氣なき氣慨なき卑屈漢たるを嗤はざるものあらんや、單に一部は撰手其人なしと言はば猶恕すべしと雖、昨年の撰手は其過半健在して而かも競漕場裡に出漕を敢せるにあらざるか、且特に一部撰手競漕なる標榜を明にして恬然耻つる所なきに至つては彼等の胸中遂に推すべからざる陋癡拙劣野卑怯懦のものたらずむはあらざるべし、既に撰手と稱すべきの一團ありて而して二部三部の撰手と相搏つる勇なく、退いて自ら屈し延いて當日の競漕會をして寂寥荒涼に終らしめたるもの其罪科甚だ淺しとなさざるなり、借問す一部の撰手と稱するの諸子(自稱?)、諸子は己に撰手の名目を甘受しながら何んが故に自ら進んで二部三部の撰手と其勝敗を決するの勇なかりしか恐らくは必敗の數初めより明かなるものありて戰に臨むの意なかりしなるへし、事何れにありとするも一部生の腑甲斐なきを證するに足るべし、縱令初めよりして必敗の數免かるべからざるものありとするも、戰を交へずして屈するが如きは男兒の耻つる所、已れ死力を致し力及ばずして終に強敵に斃る、斃ると雖亦之れ丈夫の本領死して余榮ありといふべきなり、予輩は一部か終に此舉に出づるの勇なかりしを痛歎して止まざるなり

抑も一部なるものは高等學校に於ける元氣の源泉にして、校風の發揚、士氣の振興總へて率先其

任に當らざるべからざるの地位にあり、然るを今日吾校に於けるが如く一部が最も無氣力にして嗤笑の府となれるが如きは全國八高校を通して未だ曾て其例を見ざる所なるべし、吾校風の發揚せざる故なきにあらざるなり、然れども幸に二部三部のあるありて大に其短を補ふものありて萎靡壞類するに至らざるもの又聊か人意を強うするに足れり、聞説二部三部の撰手は一部が無氣力にも破廉耻にも本年競漕場裡より脱退して競漕場裡の精華たる各部撰手競漕を不調に歸せしめたるを聞くや、相共に鉄腕叫鳴して止まず、期せずして日本海上に輕舸を舩し、彼に玉山を崩し此に白龍を蹴つて大に脾肉の嘆を散せしとかや之を聞くもの誰れか其意氣の熾なるに驚かざるものぞ、此を彼の一部が唯に口實を學程の繁なるに藉りて巧に卑屈優柔の譏を免れんとせしに比すれば其差雷に天淵のみならんや、一部は斯くの如くにして遂に多年の慣例たる各部撰手競漕を廢止して毫も介意せざるものゝ如し、豈に冷淡陋劣の極ならずとせんや、他日亦之れに類するの事ありて各部撰手競漕を廢せんとするが如き事起りたらんには、一部は眞に惡慣例を作出せるものとして其責の歸する所甚だ鮮少なざるべし、然れども二部三部の元氣隆盛なる今日の狀を以て推せば、斯くの如き怯懦卑劣の手段に倣はざるべきを信じて疑はず、却て一部たるもの此の醜態を再演することなきかを疑ふのみ

嗚呼一部は前述の如き不名譽の歴史を作し、一部は柔弱なる學術と短艇競漕とを兩立せしむるの勇氣なきなり、彼等は下宿樓上三々五々相會して大言壯語徒らに英勇を月旦し天下を論ずと雖、全く之れ机上の空論、敢て齊東野人の言と選ぶ所なきなり、彼等には一致團結の氣風なく、

愛校の精神を缺き、意氣消沈して終に巾幗者流にだも及ばざるものと言ふも、固より過言にあらざるべきを信じて疑はざるなり、

余は大体に於て斯く論評するに憚らざるものなりと雖、蠢々たる一部三百の青衿中自ら血あり涙あるの士尠しとなさざるべし、希くは其等の子奮つて現時一部學生の間を風靡せる因循姑息柔弱淫靡の惡弊を一掃して剛毅率直獨立果斷の美風を養成し、以て今回の汚名を洗滌するに努められよ、延いては校風大に發揚するに至らん、之れ予輩が一部の諸子に望んで止まざる所なり、至願、至願、

井上博士の「青年と宗教心」を読む

鴨

水

「青年と宗教心」は、博士が雜誌「青年界」記者の依頼に應じて「青年界」に載せんが爲めに話されたるものにして、載せて「青年界」第貳卷五號の紙上に在り、博士の意、固より今日の青年を訓ふるに在りて、敢て江湖の批評を待たんとせざるにはあらずと雖も、又博士が此の如き重大なる問題に對しては、必ず、最も慎重の態度を取られたるものと信じ、爰に少しく之れに對する予の愚見を述べて諸兄の教を仰がんことを欲す、若し夫れ客觀的に宗教を觀察し、宗教上の哲理を論ずるに於ては、予は到底先生に對して一言の辯駁をだに爲し得べき者にあらずと雖も、所謂主觀的の宗教觀に至りては、吾或は博士に一日の長たるものあるべし、宗教は空理空論の上に成立するものにあらず、冷酷なる哲學者の頭腦を以て、宗教上のものを解釋せんとするは、或は少しく「わがさ違ひ」の嫌なきにあらずるか「眞理は單純也」、無學なる一青年の口を借りて出づる單純なる思想、又何ぞ必ずしも、眞理を去る甚だ遠しと爲し得んや。

博士は先づ劈頭に於て、現今世に所謂宗教、たとへば、佛教とか基督教とか稱するものが、其の歴史が最早陳腐なるを以て、後來益々發達進歩の氣運に向ふべき青年男女に對しては、左程の貢獻をも爲すことを得ざるか如く論ぜられたり、是れ實に暴の極にして、所論漆膚其に談すべからざるものあり、新しきものは未だ必ずしも悉く優れたりと言ふことを得ず、反て吾人最も古きものの中に最も良きものを見出すこと決して尠しとなさず、眞理は萬世不朽なり單に萬世不朽なるのみにあらず、實に千古不變のものたるなり、眞理に陳腐新鮮の別ありなど言はば、人は必ず其の愚の到底及ぶべからざるを笑はん、而も博士の此の論の如き又此の愚人の論を耳にするの感なくんばあらず、よしや現時我が佛教界は、滔々相率ゐて墮落の道に向はんとしつゝありとも、又よしや佛教信者の或る者が、笑ふべき迷信に沈溺しつゝありとも、此等の現象を見て、直ちに「佛教は僅に之れ等の老人輩若くは無教育者に慰藉を與ふるの具となつて居るだけでありまして有爲活潑の青年に裨補する所誠に尠いもの」と言はぬければならぬ」と論ぜられたるが如きに至つては、是れ實に速斷もまた甚しと言ふべきなり、予を以て之を見れば、佛教の眞理は、必ずしも釋尊降誕の當時を以て創造せられたるものにあらず、佛教の眞理は、地球創造の以前に於て、既にこれありしものにして、地球滅亡の後、尙ほ永遠に眞理として存續し得べきもの也、唯釋尊ありて、所謂佛教の眞理を發揮したるのみ、佛教の眞理は釋迦降誕の當時も、今日も、其の間に於て此の變化、幾何の軒輊あることなし、たゞ世上幾多の愚衆が、其の糟粕を嘗めて、以て其の眞髓を得たりとなし、自己を揚げんとする結果、勢ひ他を排斥して、一方に樹立し、所謂分派を開

きたる、是れ尙ほ封建時代に於て。幾多の諸侯が、東西に割據して、以て得たりとなしたると異なるなし、明治維新と共に、封建割據の陋弊を悟りて、直ちに中央集權の美を見たと同じく佛教に於ても、早晚兒戲的の割據を廢して、釋尊降誕當初の大信念に、融合し來るは、必ずしも、佛教徒の空想として、一笑に附すべきものに非ざるべきが如し、たゞ憾むらくは、現時、佛教界に事理を解する者甚だ多からず、徒らに自家の偷安に急にして、佛祖大信仰の萬一を体する者無く、白鬚、醜骸を擁して、世と共に秦平の酒に酔ふ、井上博士が這般の現象を見て、爰に此の言あるは、實に自然の勢なるが如しと雖も、「正宗も人次第」、單に僧徒の墮落、若くば現時佛教信者の状態を傍觀して、直ちに佛教そのもの眞價を速了せんとせられたるは、博士としては、其の余りに輕卒に過ぎたるの嫌を受けざる能はざるべし、況んや博士が「基督教は其の歴史と言ひますれば、殆ど佛教と同様に陳腐なるものでありますけれども、何分西洋より新に輸入し來たものであります所からして、佛教に比すれば多少新規の着色があり、西洋の文明を帶ひて來て居ると云ふ所に取り所があるです」と論ぜられたるに於ては、三尺の童兒尙ほ其の誤れるを悟らん、何となれば、基督教は決して西洋文明の趣味を帶び來れるが故に貴きにあらず、是れ全く事の本末を顛倒したるものにして、今日の西洋の文明は、全く基督教より胚胎し、發達したるものにして、基督教の信念は原因にして、今日の文明は其の結果なり、要するに社會は宗教の感化を受くれども、宗教は決して社會の感化に依りて發達進歩すべきものにあらず予は飽くまでも、博士の此の觀察の根本的大謬想たるを主張して止まざる也

二

博士は次に又論じて曰く、「……併しながら青年に強ひて宗教を信仰せしむる必要は無からうと思ふのであります、宗教の必要を感じないのに、是非其宗教を信仰しやうと勉むることは眞に無用の仕事であります、其の譯は第一青年は未だ前程萬里の身でありまして、漸く色々な學術を研究して智識を開發するの途次にあるのでありますからして、未だ宗教を選択するの力が無い、……未だ宗教を選択し得る力の無いのに、強ひて大早計に選擇しやうとすれば甚だ危ない、後日の後悔の基であります。」

固より先生の言の如く、未だ著しき宗教心の發現を見ざる青年者に、強ひて宗教を勸めんとするは、決して策の得たるものにあらずと雖も、既に幾分か、宗教的感念の發したる青年が、宗教に入らんとするに當り、其の猶ほ未だ宗教選擇の能力に缺けたりといふ一口實の下に、之を防止せんとするは、是れ實に沒常識の沙汰にあらずや、言ふまでもなく、宗教は決して學問にあらず、空論家先生の道樂にあらず、極言すれば是れ實に精神の糧食なり、人類の生命也、宗教を無視する人は、是れやがて自己の存在を否定するに外ならず、吾人の所信已に此の如し、宗教を道樂視せんばかりの博士の所論に對して、予の思想の絶對的に相容れざるは、實に勢の己むべからざる所也。

人は生れながらにして宗教心を有す、是れ實に人類の最も高貴なる特長たり、而して此の宗教心の種子を培養し、發達せしむるは、是れ實に人類の自己に對する最大の義務にして、又實に人類

特有の特權たる也、宗教は單に未來の問題を解釋せんとするものにあらず、又必ずしも過去の歴史を語らんとするものにあらず、是れ實に吾人目下の活問題を解かんとするもの也、固より宗教は吾人が何處より如何にして來り、何處へいかにして、到らんとするを説明するものに相違無からんも、決して之を以て満足せんとするものにあらず、宗教は一少くとも眞正の宗教は、實に人類の糧食と稱して可なり、向上の大精神も之によりて愈々發展し得べく、世界を動かすべき大信念も亦之れによりて始めて修養し得べし、「信仰は事實也」、其の迷信たるを否とを論せんとするは既に愚者の業なり、簡單なる數學上の理論をだに、完全に證明し得ず、之を暫く公理なる名目の下に眞理と假定し、然る後數理學の研究を進むるが如き滑稽を演じて得々たる間は、人類は決して此の大問題に容喙するの權利を有せず、公理を公理として假定すると同時に、事實を事實として認定せしめよ、「信仰は事實也」。

既に「信仰は事實也」、事實を事實として承認するは、三歳の童兒尙ほ且つ之を能くし得べし、是れ予が先きに人は生れながらにして宗教を有すと説きたる所以、又宗教が貴賤を論せず、學者と否らざるを問はず、全く普遍的なる所以也、既に三尺の童兒の能くし得べき此の明白なる事實の承認は現時の青年に向つては、實に些の困難をも見ざる也、博士が、青年者の宗教選擇の能力に缺けたるを以て、其の研究を否定せんとせられたるは、實に杞憂の甚しきものにして、現時の青年は決して基督教と天理教とを混じ佛教と拜火教との差別を知らざるまでに沒常識ならざる也、況んや青年時代は所謂人世の春にして、滿身の熱血時あらば溢れんとして、放逸に流れ易く、無

邪氣なりし少年時代は、既に前宵の夢と去つて、漸く人世の疑問に觸れんとして、宗教を求むること急に、又一方に於ては向上の精神の最も盛なるべき時代也、彼等の理想は純潔なり、彼等の希望は春の如し、彼等は感情の動物なり、彼等は火なり、青年時代は熱の時代也、宗教は主として情の上に立つものなり、理の上に立つものにあらず、従つて最も宗教の効果を収め得べき時は、此の熱したる青年時代に在り、純潔なる理想に活きんと欲する時代に在り、彼等の觸れんとせる人生の懷疑を解き、彼等の理想追求の欲望に満足を與へ、彼等の熱したる生活に一個冷靜なる理性の眼を與ふるものは、唯此の宗教あるのみ、純潔なる理想に活きし青春の時代は去つて、心は一に物質の一方に傾き、高く天の一方を凝視して堯爾たりし時代は既に過ぎて、眼は低く地上の榮華に眩む時、此の時に及んで宗教の聲を聞くもア、既に晚いかな、之れこそ博士の所謂「後悔の基であります」。願くば「爾の若き時に爾の造物主を憶えよ」。

三

博士又曰く『併し從來の宗教でありますと云ふと、どうも人を臆病にする傾向がある、有爲活潑なる前程萬里の青年をして、小膽ならしむると云ふやうなことが随分あり得べしであります。……些々たる過失までも悉く根底より抜き去らうと云ふことは人間が完全であらざる以上は中々難しい事である、殆ど實際には出來得べからざることである、それよりは一方に於て大膽なる氣象を鼓舞して各自の自然に有して居る長所を發揮して、國家の爲め、人類の爲め、世の文明の爲めに出來得べきだけの貢獻をしやうといふやうな大精神を有て打開いて來ることが必要である、』

これさへ遂げますれば、些々たる過失の如きは決して問ふ所で無い云々。

是れ亦暴論なり、否言論也、博士の所謂從來の宗教とは果して何を指されたるかは疑問なれどもまさか天理教や、黒住教や、さては譯もわからぬ偽宗教を對象として、此の言を吐かれたることとは受取れず、少くとも今日文明國の宗教として許さるる基督教、佛教信者の行動より打算せられたることゝ信じて差支無かるべし、試みに思へ、人は宗教を信ずると同時に臆病になる傾向を有するや否や、博士は此の「臆病」なる二字をいかに解釋し居らるかば、是亦一個の疑問なれども現時普通一般に人々の解釋する所に依れば、「臆病」とは自己の義務と信じつゝも、之れを爲すこと々自己に尠からざる危険と不利益とを起すが如き場合に、逡巡狐疑大果斷を以て自己の義務に邁往する能はざるを謂ふ也、是れ固より極めて狭き定義也、今一步を進めて言はゞ自己が外界の誘惑を受けて、毅然自がら「否」の一字を吐く能はざるを言ふ也、語を換へて言はゞ「臆病」とは「意氣地無し」なり、賄賂の前に頸の根の下るが如きを謂ふ也。

つまりぬ理屈はさて置き、今暫く、目下の世上、宗教を信じつゝある人と、未だ宗教の感化を蒙り居らざる人とを比較して、果して何れに博士の所謂臆病者多きかを考へしめよ、固より此の種の事は精細なる統計表に依らねば、確固たる斷定は下されねど、世人の知る所を以て推せば、無論、此の無宗教者の中に最も多く此の「臆病者」を見出しつゝあるなり、些々たる自己の惡癖に勝つ能はずして、妻子を飢害に泣かしむる「大臆病者」は吾人の往々にして無宗教家の中に發見する所なり、人或は我田引水と言はんか、近く目下我が國教育界の一題目となれる教科書取賄事件を

見よ今囹圄に呻吟せる何縣視學官閣下、何中學校長先生は、思ひきや是れ所謂「臆病者」の棟梁たりし也而して或る憑據すべき新聞記者の報する所に依りて、吾人は彼等の中に、一人の宗教信者あらざりしことを知りぬ「從來の宗教でありますと云ふとドウも人を臆病にする傾向がある」や否や、願はくば事實をして事實を語らしめよ。

四

要するに宗教を信じたるが爲めに臆病となるが如き憂決して有ること無し、否反つて宗教を信じたるが爲めに、從來不羈放縱始末にたへざりし者が、一朝變じて温良謙遜の人となりし事實は世上其の例に乏しからず、況んや博士の所謂「各自の有して居る長所を發揮して、國家の爲め、人類の爲め、世の文明の爲めに出來得べきだけの貢獻をしやうと云ふやうな大精神」なる人物は實に宗教を信じたる人々の中にも其の例多く、自己一人の利害得失を度外に附して、一意社會人類の爲めに貢獻せんとするが如き大精神は、多くは宗教的信念より胚胎し來るものにして、古來所謂英雄豪傑として、世人の欣仰を受けたるものゝ其の多くが宗教的信念を有したりしは實に掩ふべからざる事實なりとす、人は決して懷疑の巷に彷徨しつゝ而も壯快なる活動を能くし得るものにあらず、人は自己の位置、自己の周圍、自己の周圍に對する關係を解釋し得て後始めて勇壯の活動を爲し得べし、而して此の自己の位置、自己の周圍及其の兩者間の關係如何を解するは實に至難の業にして、一朝一夕に能くし得べきものにあらず、人は未だ現在の智識を以てしては、推理の結果適當の結論を得ること能はず、人類は唯這個問題を直覺して満足すべきものなり、而

して人類をして之れを直覺せしむるものは、世上唯一個の宗教ある耳。

五

「……要するに青年は雄壯活潑にし、將來の事業に望を屬して、炎々たる熱心を以て進むべきである。陰氣臭き宗教の爲めにかぶれるやうなことは、甚だ青年の爲めに取らざる所であり、青年の宗教は寧ろ實行にありと考へたならば宜しからうと思ふです、即ち不行跡に陥らざる男子らしき行爲を以て青年の期すべき所とするのてあります、此点に於て甚しき過失さへなければ、其他の事は深く咎むべきでなからうと思ひます」是れ實に博士の結論なり、又暴なるかな、「陰氣臭き宗教」、妙な言葉かな、人世の目的若し、「飲めよ食へ吾は明日死すべければ也」に在りすれば吾等は何を苦んで、博士の所謂「陰氣臭き宗教」を信せんや、然れども世は幸にして盲者の集會所にあらず、跳ねて、躍つて、喰つて寝て、而して糞を垂れて死して満足する人のみならば、宗教は馬鹿者の議論として一笑に附せられんも未だ知るべからず、然し人は飽くまでも人も喰つて寝て糞を垂るゝは禽獸尙ほ之を能くす、人は不幸にして之を以て満足する能はず、一たび人生終局の目的に思を馳すると同時に、嚴肅にして侵すべからざる一種崇高の思想は滔々として其の胸中に湧湧し來るなり、人は是に於て既に宗教の領域に入れり、世俗或は之を見て嘲笑の眼を向けんも、其の人に於て又何かあらん、跳ぬる者をして跳ねしめよ、躍るものをして躍らしめよ、唯之を以て満足し能はざる者は來れ、來りて而して汝の價値を解せよ、嗟乎是れ實に宗教の聲なり、英雄にして始めて英雄を知る、人類の思想も宗教の域に入らば既に超自然なり、科學者

も哲學者も、到底其の間に何等の解釋をも下し得べきものにあらず、人はこゝに至つて既に神秘也、

要するに博士の所論は多くの場合に於て誤解たるを免れず、少くとも博士は宗教を誤解せり、博士は宗教を解するに、哲學を解き、科學を説くと同様の態度を以てせられたるやの疑なき能はず従つて博士の青年に對する觀察は餘りに物質的也、唯物論的たるを免れず、彼等を拘束するに、單に倫理學、道德學のみを以てせんとするは實に大なる謬見たるを免れず、青年は理想の時代なり、彼等は宗教の聲を聞かすしては、到底満足し得べきものにあらず、理想は彼等の生命なり、宗教は彼等の血液也。(三十六年五月)

社會的制裁

北 川 散 士

社會混沌の聲は、今や一種の常套語となり、其混亂の混亂たるを知るに難からしめぬ、此世は牢獄の世なり、假面の世界なり、嗚呼文明とは何ぞ、開化とは何ぞ、吾人は唯五里霧中に彷徨し、其何物たるやを云々する能はざるなり、吾人は猥りに陳言奇語を弄して社會を痛罵せむと欲するものにあらず、されど現時社會の情況一として嘔吐を催さしめざるものなく、吾人また傍觀して止むを得ざるなり、試みに皿大の活眼を開きて世上を視よ、淫佚、墮落、貪財、姦詐、強姦、殺人等の語は社會の通有語となり、世人の之に對するや毫末も怪まず、恰も人の歩むを見るに同じ、

眞なるかな現社會は全然反對的なりとは、眞摯は迂濶とせられ、正直は頑陋とせられ、權謀は伶俐とせられ、放縱は大膽とせられ、唯眼中に映するものは私利のみ、虚名のみ、げにや澆季の世とは是れなるか、末世とは是れを意味するか、善は惡となされ惡反て善と賛せらる、弱者果して強者の食たらざるべからざるか、財を盗むの賊は誅せらるゝも國を盗むの姦物は貴族たる天則あるか、人道果して何處にあるか、平等果して其影を見るを得るか、僞！汝は何故なればかくまで幸福なる生を受くるか、

世人動もすれば曰く、道德何物ぞ、かゝるかたくりしき語は舊世紀の產物にして二十世紀の需用品に非ず、此文明の世に生を受くるもの何ぞかゝる末節に拘々すべしや、酒は飲むべし、色は漁すべし、賄賂何ぞ擇はむと、彼等奴輩は徒に黄金を神と崇め、定見なく又主張なし、彼等が愛しき妻子は陋屋に叫ぶも敢て意に介せず、己が身獨り酒池肉林の間に妖婦と相樂む、之を詰れば則ち曰く、大行は細謹を顧みずと、あゝ、彼等は實に國家の賊、社會の紊亂者に非ずして何ぞ、今や斯る輩は官吏といはず、紳商といはず、軍人といはず、教育家といはず、滔々たる天下比比皆然らざるはなし、吾人は先きに社會を以て神聖なるものとし恃むべきものと信ぜり、思はざりき社會の裏面には慘澹なる暗雲のひそめるあり、吾人徒に岐相の見をなしを笑はむのみ、噫闇黒の社會！、罪惡の社會！、汝は彼自然に表はるゝ清淨無垢の美妙に對して愧づるなきか、試みに見よ自然の絶美を、皎月大空に懸るの夕、一棹を清湖に弄せんか、金波月光に映じて遠く光り、彩鱗波上に跳躍して月光を見舞ふ、四邊聲なく、遠寺の一鐘三更を告ぐ、此觀に身を任すも

の感夫れ如何、是に於てか東坡歌うて曰く、渺滄海之一粟哀吾生之須臾、羨長江之無窮、挾飛仙以邀遊、抱明月而長終と、また時鳥片破月を鳴き落し空青く地暗き秋の夜、獨り野邊の茅屋に蟲聲を聴く、鳴々哀々、恰も天裡の妙音の下界に漏るゝかと覺ゆ、是に於てか古人謂はずや、時鳥鳴きつる方を眺れば、只有明の月ぞ残れると、嗚呼美なる哉、妙なる哉、吾人唯天與の深恵に感謝し、人間の迂なるを罵るのみ、

抑人は社交的動物なり、社會ありて此身あり、此身ありて社會あり、社會と人とは造次顛沛も離るべからず、既にかゝる關係ありとせば吾人は社會に對する本務を負はざるべからざるや昭々乎として明かなり、近時往々極端なる個人主義を唱導し、社會を無視せんとするものあり、是れ大なる謬見たるを免れず、然りと雖も社會に住するもの盡く孔子釋迦基督の如き聖賢に非ざれば各罪惡あるを免れず、是れ洋の東西を問はず、時の古今を論せず、勢の然らしむる通弊なり、果して然らば如何にして此通弊を除かんか是に於てか吾人は良心の抑壓、國家の法律、社會の制裁の三者を提出せんと欲するなり、

夫れ自由は文明の一要素、人生の活路なり、是を以て自由てふ二字は何人と雖も之を望みて止まざる所なりと雖も完全なる自由に至ては此世に於ては望むべからざるなり、否望むべからざるのみならず自由の制限是れ亦人生の肝要條件なり、見よ人生の秩序は階級によりて得べく、貧富の差異は文化發達の源泉にはあらざるか、吾人の望む自由は制限的自由にして絶對的自由に非ざるあり、是にして誤らんか彼海外に於ける虚無黨、又は近時往々唱道せらるゝ極端なる社會主義

の如き國家成立上許すべからざるもの生せん、望むべきは自由なるかな、復た恐るべきは自由なるかな、自由の制限それ必要なり、是に於てか外部の制裁を要するなり、固より内には良心の抑壓あり、外には法律の制裁あり、さり乍ら良心の抑壓は恰も護謨丸を屢、用ふるが如く、其之を用ふるの度を増すにつれて漸次其彈力を減じ終には之を感ぜざるに至らん、又法律の制裁は其効直接的なれども唯有形的に對するのみにて未だ其行爲に現れざるものに效なし、即ち縱令惡人たりとも未だ法網にかからざるか若くは既に之を犯すも能く天網を逃るゝ輩には、如何とも之を罰すべきなし、よしさらはたとひ法律を無限に緻密ならしむるも何人之を檢察するか、何人之を判するか、天下の人悉く裁判官たらしむべからず、天下の人盡く探偵となすを得ず、是に於てか社會的制裁を以て其缺を補はざるを得ざるなり、

顧ふに社會の制裁は無形の法律にして、社會を保持し進歩せしむる上に於て忽にすべからざることとす、然らば如何なる方法を以て之を實行すべきか、夫れ制裁は時と處とにより之を異にするを要す、若し其法にして時勢に通せず又其地の狀態に合せずんば、何人も之を守らず、之を犯して顧ざれば社會てふものは成立せず、故に社會的制裁は其世の進歩と平行線をなさざるべからざるや明なり、若し此釣合にして失れんか、社會は忽然其影を失はむ、豈に寒心せざるべけんや、また社會といへは實に漠々たるの觀なきにしもあらずと雖も其間に種々の區別あり、故に其個人に及ぼす制裁は大局部より之を出すのみならず、多くの小部落よりも之に及ぼさざるを得ず、社會の組織は恰も軍隊の如く、單に軍隊といへは一個なれども、旅團あり、聯隊あり、大隊あり、中隊

あり、其間各制裁行はる、其他社會の制裁皆斯くの如し、或は職業の制裁あり、或は師弟の制裁あり、或は階級の制裁あり、或は朋僚の制裁なる等一々名狀するを得ず、然り而して如何なる制裁にまれ能く善に導き惡を避けしめ彼我の利をともにせんとするや一なり、故に之を行ふ手段として先づ一定の規律を設け、各員をして之を遵奉するの義務を負はしめ、若し其規律に違反するものあらば、速に之を交際場裡より放逐するを要す、前述の如く人は社會を離れて立つを得べきにあらず、故に一旦世の交際場裡より放たれんか恰も死人の如く、一步も進む能はず一足も退くを許さず、此宣告を受けしものは寧ろ身を殺さるゝも堪ふる能はざらむ、古の封建時代の武士道の如く、又現時泰西の紳士界の如く皆かゝる方法を以て社會を抑壓しつゝあるなり、其詳細に至ては冗長を避けて茲に略せん

とす、顧ふに我邦に於て交際を輕視すること塵埃の如し、試みに彼商界を觀よ、彼等は唯眼前の小利に汲々し、詐欺を以て常習の如く思考し、朝に南人を欺き、夕に北人を弄す、嗚呼愚なるかな馬鹿商人！然るに世人の愚なる之を見て怒らず憤らず、平然たること秦人が越人の肥瘠に於けるが如し、かくの如き輩反て莫大の金銀を積み、正義の士頑陋なりとて世上より排斥せられて九尺の軒に呻吟す、憐むべく嘆すべきは現時の社會なるかな、所謂世の紳士(偽紳士)誇つて曰く、濁世に生れては濁水に沈む、是れこそ處世の大方便なりと、彼等が徒焉ぞ語るに足らむ、噫想うて是に至れば嘆亦嘆、唯長大息をなすのみ、

是を以て社會的制裁力を鞏固になすは今日より急なるはなし、宜しく正義の利劍を揮つて彼等腐

敗壞の頭を空中に舞はしむべし、實に社會は總ての人をして判官たらしめ、總ての人をして探偵たらしめ、一たび汚物の之に觸るゝあらば忽ち罰來りて社會の外に放逐せらる、即ち社會的自殺者となるなり、誰か之を見て戰慄せざるものぞ、若し社會の制裁にして斯くの如くならば、社會のあらゆるものを抑壓し、彼國家の法律よりも層一層有効とならむ、近時尤も清潔を旨とすべき教育界に教科書事件起れりと聞く、是れ社會腐敗の顯著なる證迹なれば此際斷乎たる處置の下に汚辱極まる俗輩を一掃せられたきこと切に吾人が當局者に祈る所なりとす、

回顧すれば我邦の道義は、一時維新の革新によりて蹂躪せられしこと恰も秋葉の大風に襲はれしが如し、然るに日進月歩、茲に時を重ねること三十載、準備の時代は過ぎ去りて整正の時代となりしものの如し、今にして此混亂を整正せざらんか、終に其之を爲すの機を失せむ、機は奔馬の如く、之を捕ふべきの時に捕へざれば遂に千里の外に逸せむ、今にして能く社會の制裁を鞏固にし以て社會の紊亂を整へざれば、放縱なる國民と化し去り、思はざる大事を起すに至らむも計るべからず、友あり吾人に告げて曰く、死者を針にて刺すも其効なし、今の社會は死せる社會なり、如何に之を警戒するも寸毫の刺戟も與へざらむと、されど吾人をして熟々世上を觀察せしむれば尙現社會は未だ死し了らざるが如し、古人曰く、國に慷慨の聲ある間は未だ其國滅びずと、今や往々國事を嘆じ、之が恢復を計らんとするの士日一日として多きを加へんとす、是れ實に吾人が前途に一縷の光明を認むる所以にして、社會の制裁を確定すべき好機に非ずや、嗚呼親愛なる諸士よ、希くは中夜人靜まり四壁寂々たるのとき、つら／＼人生を思ひ浮べ、吾は何の爲めに

生くるか、我に何の理想あるか、吾に何等の光明を認むるかなど自問自答せよ、此の嘆すべき社會に於て望の光を有するものは青年諸士のみ、今日の急を救ひ、能く起死回生の重任を全うし、清淨なる天土の如き社會を造らるゝは恐くは諸士ならん、諸士の責何に比すべきか、諸士にして能く其身を顧みる處あらば宜しく一本のマツチが風力を以て其勢を増し、天を焦し山を燒き、野をはらひ、家を倒すが如きエナージを以て全世界を照らせ、世俗の塵埃顧みる所に非ず、唯自覺の鎧をき、安心の旗を擧げ、勇往猛進の利劍を提げて、陣頭に臨むべきなり

曾愁香 結破顔遲、

今日妖紅委地時、

若是有情爭不哭、

夜來風雨葬西施、

雜 錄

○培養植物の原產地並に始作年代

市 村 塘

今日吾人の所謂栽培植物と稱するもの、其種數の多き實に數百も當ならず是皆吾人が自己の目的の爲に、或は根莖葉、或は花器、果實、種子の諸部をして殊に發達せしめたるものに外ならざるなり、然らば各培養植物は皆て自生的狀態のとありしに相違なし、されど其原產地は果して何處なりしや、又始作年代如何に至つては、誠に漠然雲を掴むか如し、唯些少の好奇心に驅られ己知

の事實を集収し、次表を組成すると爾り

(一) 地下部採集の爲培養する植物類

植 物 名	始 作 年 代
大 根 (一年)	自今二千年以前
どもしりさう (近多年)	同二千年以後
蕪 菁 (二年)	同四千年以前
胡 蘿 蔔 (二年)	同二千年以前
西 洋 茜 草 (多年)	同二千年以前
ばらもんじん (二年)	同二千年以後 (？)
黃 花 ばらもんじん	同二千年以後
砂 糖 大 根 (二年)	同二千年以前
玉 葱 (二年)	同四千年以前
青 葱 (多年)	同二千年以後
葫 葱 (多年)	同二千年以後
蝦 夷 葱 (多年)	同二千年以後 (？)
芋 (多年)	同二千年以前
海 芋 (多年)	(？)
蒟 蒻 (多年)	(？)

原 産 地
溫帶亞細亞、支那或は西方亞細亞
東方溫帶歐羅巴
歐洲、西方失必兒 (？)
歐洲、西方溫帶亞細亞 (？)
西方溫帶亞細亞、歐洲東南部
歐洲東南部、アルジェリア
歐洲西南部、カフカス南部
カナリヤ諸島、地中海沿岸、西方溫帶亞細亞
波斯、アフカニスタン、ベルチススタン、パレスチナ (？)
失必兒、(吉利吉思よりハイカル迄)
溫帶歐洲
溫帶及び北方歐洲、失必兒、カムチアツカ、北米 (ヒュロン湖)
印度、馬來群島、ポリネシア
錫蘭島、馬來群島、ポリネシア
日本 (？)

植 物 名	始 作 年 代
黃 獨 (多年)	同二千年以前 (？)
つ ね い も (多年)	同二千年以前 (？)
薯 蕷 (多年)	(？)
大 薯 (多年)	(？)
き ね い も (多年)	亞米利加發見前 (？)
馬 鈴 薯 (多年)	亞米利加發見前
甘 薯 (多年)	亞米利加古代
(二) 莖葉採集の爲培養する植物類	
甘 藍 (二年三年)	自今四千年以前
み づ た が ら し (多年)	(？)
胡 椒 草 (一年)	同二千年以前
馬 齒 莧 (一年)	同四千年以前
蕃 杏 (一年)	同二千年以後
からんだみづば (二年)	同二千年以前
の ち し や (一年)	同二千年以後
萬 苣 (二年三年)	同二千年以前
ハッレンヤ 蓼 (一年)	同二千年以後
菠 薐 (一年)	同二千年以後

原 産 地
南方亞細亞 (殊にマラバル、錫蘭、爪哇？)
支那 (？)
日本 (？)
亞細亞群島の東部
北米、(インディアナ)
チレ、ペルー (？)
熱亞米 (何處？)
歐洲
支那、日本 (？)
歐洲、北方亞細亞
波斯、(？)
西方雲山より南方露西亞及び希臘に至る
新ゼーラント、新ホルランド
溫帶及び南方歐洲、北方亞弗利加、西方亞細亞
サルデニア、シチリア
南方歐洲、北方亞弗利加、西方亞細亞
地中海沿岸、カフカス、トルキスタン、波斯

雁 ^カ 來 ^ト 紅 ^リ (一年)	(?)	熱帶亞弗利加、印度(?)
酸 ^カ 摸 ^モ (二年多年)	(?)	歐洲、北方亞細亞、印度の山地
石 ^ツ 刀 ^バ 柏 ^ハ (多年)	同二千年以前	歐洲、西方溫帶亞細亞、
むらさきうまこやし(多年)	同二千年以前	西方溫帶亞細亞、
あかつめくさ(多年)	同二千年以後	歐洲、アルジェリア、西方溫帶亞細亞、
やはすゑんごう(一年)	同二千年以前	歐洲、アルジェリア、カフカズの南部
胡 ^コ 廬 ^ロ 巴 ^バ (一年)	同二千年以前	印度の東北部及び西方溫帶亞細亞、
こめつぶうまこやし(二年三年)	同二千年以後	歐洲、亞弗利加北部(?)、溫帶亞細亞、
おほつめくさ(一年)	同二千年以前	歐洲、
茶 ^チ 麻 ^マ (灌木)	同四千年以前	アサム、支那、マンチユリア。
黃 ^{ワウ} 藍 ^{ラン} (灌木)	同二千年以後(?)	爪哇、錫蘭、
木 ^キ 加 ^カ 利 ^リ (樹木)	同二千年以後	印度(?)
有 ^ユ 皮 ^ヒ (樹木)	同二千年以後	新ホルランド、
桂 ^{ケイ} 麻 ^マ (多年灌木)	(?)	錫蘭、印度
芋 ^オ 麻 ^マ (一年)	同四千年以前	支那、日本、
大 ^{ダイ} 麻 ^マ (一年)	同四千年以前	ダフリア、失必兒、
桑 ^{サウ} (白)	同四千年以前(?)	印度、蒙古、
桑 ^{サウ} (黑)	同二千年以前(?)	アルメニア、北方波斯。
甘 ^{カン} 蔗 ^サ (多年)	同二千年以前	コシエンシヌ、(?)支那の西南部、

歐洲、西方溫帶亞細亞、
歐洲、アルジェリア、西方溫帶亞細亞、
歐洲、アルジェリア、カフカズの南部
印度の東北部及び西方溫帶亞細亞、
歐洲、亞弗利加北部(?)、溫帶亞細亞、
歐洲、
アサム、支那、マンチユリア。
爪哇、錫蘭、
印度(?)
新ホルランド、
錫蘭、印度
支那、日本、
ダフリア、失必兒、
印度、蒙古、
アルメニア、北方波斯。
コシエンシヌ、(?)支那の西南部、

マ ^テ 茶 ^チ (小樹木)	同亞米利加古代	ハラグアイ、及び西方ブラジル、
古 ^コ 柯 ^カ (小樹木)	同亞米利加古代	ペルーの東部及びボリビア、
規 ^キ 那 ^ナ (小樹木)	同亞米利加發見後	エクアドル(クエンカ地方)
煙 ^{エン} 草 ^{ソウ} (一年)	同亞米利加古代	ニクアドル及び附近地方
龍 ^{リウ} 舌 ^{ソウ} 蘭 ^{ラン} (多年)	同亞米利加發見前	メキシコ、

(三) 花部採集の爲培養する植物類

丁 ^{チヤウ} 香 ^{シヤウ} (樹木)	(?)	美洛居、
忽 ^フ 布 ^フ (多年)	自今二千年以後	歐洲、西方溫帶亞細亞、失必兒
泊 ^フ 藍 ^{ラン} (多年)	同四千年以前	南方以太利、希臘、小亞細亞、

(四) 果實採集の爲培養する植物類

ざ ^ン 櫛 ^シ (樹木)	自今二千年以前	大西洋諸島、瓜哇の東部迄、
枸 ^コ 櫛 ^シ (樹木)	同二千年以前	印度、
臭 ^ク 橙 ^{テイ} (樹木)	同二千年以前	印度の東部、
香 ^{キヤウ} 橙 ^{テイ} (樹木)	同二千年以後	支那及びコシエンシヌ、
蜜 ^ミ 柑 ^{カン} (樹木)	(?)	支那及びコシエンシヌ、
あんごすたん(樹木)	(?)	スندگان島、馬來半島、
葡 ^ポ 萄 ^{タウ} 樹木	自今四千年以前	西方溫帶亞細亞、地中海沿岸、
棗 ^{サウ} (樹木)	同二千年以前	支那、

(?)
自今四千年以前(?)
(?)
自今二千年以後
同二千年以後
同二千年以前
同二千年以前
同四千年以前
同四千年以前
(?)
自今四千年以前
同四千年以前
(?)
自今四千年以前
同四千年以前
(?)
自今四千年以前
同四千年以前
同二千年以前
同二千年以後(?)
同二千年後

埃及よりマロツコ迄、
印度、
ソシエテ、フレンジレイ及びフィジー諸島
温帶歐洲及亞細亞、
温帶歐洲及び西方亞細亞、北米の東部、
カスピ海より西方アナトリア迄、
アナトリア、カウカズの南部^{ベルシヤ}波斯の北部
支那
地中海沿岸、西方温帶亞細亞、
温帶歐洲及び亞細亞、
蒙古、マンチウリア、
歐洲、アナトリア、カウカズの南部、
波斯の北部、カウカズの南部、アナトリア、
日本、
波斯、アフガニスタン、ベルヂスタン、
馬來群島、コシエンシーヌ、バルマ、印度の東
北部
印度、モロッカ、アビシニア、
ギネア、
印度、ベルヂスタン、ギネア、

三十八

同四千年以前
同四千年以前
(?)
自今二千年以後
同二千年以後
同二千年以後
同二千年以後
(?)
(?)
自今四千年以前
同四千年以前
同四千年以前
同四千年以前
同四千年以前
(?)
(?)
同四千年以前

熱帶亞弗利加、
印度、
日本、瓜哇、
印度、
溫帶歐洲、亞弗利加北部、カウカズ、西方ヒマ
ラヤ、
北方及び溫帶歐洲、失必兒、カウカズ、ヒマラ
ヤ、合衆國の東北部、
北部及び中央歐洲、アルメニア、シベリア、マ
ンチュリア、西方ヒマラヤ、
日本、北方支那
支那、印度、アフガニスタン、ペルシア、アルメ
ニア、アナトリア、
シリア、南方アナトリア、及び附近諸島、
印度、
地中海沿岸中部及南部シリアよりカナリア諸
島に至る、
西方亞細亞及亞弗利加、エウフラトよりカナ
リア諸島迄、
南方亞細亞、
ギネア、
西印度諸島、

檳 如 樹(樹木) (?)
 ねらんたいちご(多年)
 蕃 石 榴(樹木) 亞米利加發見前
 南 瓜(一年) 亞米利加發見前
 刺 梨(多年) 亞米利加發見前
 利米利加柿(樹木) 亞米利加發見後
 てんじくまもり(一年) 亞米利加發見前
 きだちたらうがらし(灌木) 亞米利加發見前
 赤 茄(一年) 亞米利加發見前
 蕃 瓜 樹(樹木) 亞米利加發見前
 鳳 梨(多年) 亞米利加發見前
 バインアップ

(五) 種子採集の爲培養する植物類

紅 蠶 阿 詔 龍 荔 枝 樹(樹木) (?)
 月 渾 子(樹木) (?)
 豆(一年) 自今二千年以後
 同四千年以前
 同二千年以後(?)

熱帶亞米利加、
 溫帶北米、
 熱帶亞米利加大陸
 溫帶北米、
 墨西哥
 亞米利加東部、
 ブラジル(?)、
 ペルー、の東方よりバヒアに至る、
 ペルー、
 西印度、中央亞米利加、
 墨西哥、中央亞米利加、パナマ、新グラナダ、
 グイヤナ(?)、バヒア(?)

南方支那、コシエンシース、
 印度、ペグ、
 印度、ペグ、
 シリア、
 カスピア海、南方、
 以太利、

豌 豆(一年) 同二千年以前
 蔓 豆(一年) 同四千年以前
 木 豆(灌木) 同二千年以後
 い な め(灌木) 同四千年以前
 緑 豆(一年) 同二千年以前(?)
 蕎 麥(一年) 同二千年以後
 栗 (樹木) (?)
 小 麥(一年) 自今四千年以前
 大 麥(一年) 同四千年以前
 ら い ゐ ぎ(一年) 同二千年以前
 からすむ ぎ(一年) 同二千年以前
 稷 こく びる(一年) 同四千年以前
 稻 (米) 同四千年以前
 柯 阿 同亞米利加古代
 甘 豆(多年) 亞米利加發見前
 玉 蜀 黍(一年) 亞米利加古代

カウカズの南部よりペルシア迄、北方印度(?)
 コシエンシース、日本、瓜哇、
 赤道亞弗利加、
 アナトリアの南海岸、シリア、シレナイカ(?)
 印度、
 印度、
 マンチュリア、中央シベリア、
 葡萄牙よりカスピア海に至る、東方アルジェ
 リア、日本、北米、
 エウフラト、地方、
 西方溫帶亞細亞、
 東方溫帶歐洲(?)
 東方溫帶歐洲(?)
 支那、日本、印度群島(?)
 印度、
 印度、南方支那(?)
 アマゾン及びオリノコ溪谷、パナマ(?)、ユカ
 シタ(?)、
 ブラジル、
 新グラナダ(?)

了

冠木劍狂

ざるなりい

雜錄

中心たる京地を距ること、多賀城舊碑の示すが如く山河幾百里、地東北に偏して氣候寒烈、人口稀少、加ふるに行路嶮難にして、西南地方の如く天人俱に宜きを得て、然も先進國の文明を輸入し得たりしが如き甚しき利便を有せざりき、故を以て彼等と文明進歩の点に於て著しき懸隔を生ずるに至りしもの、固より深く怪むに足らざるなり、往昔蒲生氏郷の會津百万石に封せらるゝや、英傑彼れが如きをして、嗚呼我事畢ると嗟嘆せしめて、雄心勃勃々伸ぶるに便なく、空しく槽檻の間に終るしめしもの、以て我郷國が天下に事を爲すに當つて、如何に其便宜少く障害の多かりしかを知るに足るべし、然れども今や此等の形勢は全く一變して、人口は多きを加へ、交通機關は完備し、鐵路縱横に走りて延長殆んど全國の過半を占め、教化の及ぶ所山村僻地に達し、文明の潮波は到る所に浸潤して、又昔日の如く世外に超然として、桃源洞裡に春夢を貪るが如きの仙境は得て索むべくもあらず、是に於てか既往にありては勇躍法洋の活動を試むる能はざりし我東北人士も、自由競争の激甚なる現今の活社會に躍出して、自己の志望を發展し、特殊の手腕を振ふの自在あるに至り、國家公共の事業は從來の如く、全く贅六狡猾の徒にのみ倚賴して却て彼等が豺狼の野心を逞うせしむるの要なきに迫り、此故に余輩は今よりして過去に於て受けたる冷笑悲慘の歴史的運命を粉碎して、將來光華燦爛たる東北の眞歴史を作出せんと期するもの、而して此の重任は當に東北青年の荷ひる天職たらずんばあらざるなり、

古來より英雄豪傑の出つる、多くは其山川風土と一大關係を有し、所謂山川の靈偉人を生ずと稱するもの即ち之れなり、彼の大英國の極北に位して氣候互寒、山河參差たる蘇格蘭土に於て尤も其

適切なるを證するに足らんか、孜々として黽勉倦むなく常に己の才幹の至らざるを憂ひしウォールター、スコットの如く、懷疑哲學派の白眉として有名なるヒュームの如き、英雄崇拜家として熱情燃ゆるが如きカーライルの如き、若しくはクライストの福音を蠻人に傳へんとし瘴烟毒霧を犯して深く亞非利加の内地に入り遂に教義の爲に殉じたるゲイングストーンの如き、蒸氣機關を發明して文明の進歩に一新時期を劃成したるジュームス、ワットの如き、且は富國論に不朽の盛名を留めたる經濟學の泰斗アダム、スミスの如き、田園詩人バーンの如き乃至哲學の大家リードの如き皆該國人にして、此他幾十百僕を更ふるも猶且枚舉に遑あらず、人傑の輩出せしこと寔に吾人をして羨望に堪えざらしむ、

顧みて我東北の位置、山河の形勢を言はんか、地國の北端に位し、巒峯重疊して蒼穹を摩し、河水洋洋として綠野幽谷の間を貫流し、氣候寒烈にして人口稀少たる奚んぞそれ蘇格蘭土に酷似せるの甚しきや、殊に住民は所謂山國的特性を備へて氣格高俊、而して沈勇敢爲の風あるも何ぞそれ蘇格蘭土に髣髴たるもの甚たしきや、況んや蘇國が屢英國に反抗して獨立を企てんと欲したるの一事と、我戊辰戰役に於ける奥羽列藩の同盟とを對照し來らば、其間自ら彰乎として住民性格の相似せる点なしとせんや、

漁笛一聲東臺の麓を辭し去らんか、直ちに鐵路二岐に分れて、一は瀾漫浩渺たる太平洋に白帆飛び、西山階樂の風光瀟洒たる優境を過ぎて益東せば、遂に水聲松籟參錯合奏して氣頓に壯に、特に春月櫻花盛に開くの時に當つては梟娜旖麗、眞幻相映して轉た古英雄が馬を停めて櫻花を咏せ

し當時の優雅を忍ばしむるの勿來の關に達すべく、一は茫々乎として際涯なき武藏野を過き、縹紗虹の如き刀水の長橋を渡り、更に那須の廣野を走れば遂に河水縈帶して群山紛糾たる白河の關に到るべし、此二關は俱に奥羽に入るの境にして是れより四圍の風物漸く雄大、人をして意氣自ら豪宕ならしむるものあり、突兀として蒼穹を摩し千古不滅の玉塵を戴ける大華、吾妻の峻嶺は高潔毅然よく東北男兒の心胸當に此の如くなるべきを表彰し、靈山の舊趾は遠く南北朝時を追想せしめて北畠氏の誠忠に鑑みて忠魂義膽愈堅からしめ、月山羽黒の仙峯は永く奥羽の鎮たるべく、恐嶽は孤峯屹立天に冲して熱火萬里を照らし玄雲黑霧をして遙かに西北利亞の野に走らしめ長へに北門の光明たり、更に河海の勝に至つては大船巨舶を容るゝの港灣甚た多くして、然かも男鹿の清境は寔に天下の奇勝、白砂青松と相映對して彼に花氈を敷き此に玉山を崩し眞に水陸配置の妙を盡す、松島の聲價は既に世人の認むる所、綠波岸を洗ふて鴻を驚かし、白雲水に沈んで松倒に立ち、群島波浪の間に點在して白湧碧翻氣象萬千たり、若しそれ北川隈河の大流に至つては舟楫の利多く其類を見ざる所、流水清徹よく河床を見るべく、亦以て我纓を洗ふに足るべし、夫れ斯くの如く東北の山川は皆雄渾の風、靈犀の氣あらざるはなく、悉く之れ吾人の靈性陶冶の上に尠なからざる感化を及ぼすものたらずむばあらざるなり、

東北の地たる夫れ斯くの如く山靈にして水精なること、宇内に冠たるものありて存す、所謂天下を經營するの大才此間に生ぜずんば將た何れの處にか生せん、殊に人類は自然と戰ふこと最も多き境遇にあるものは其進化發達亦最も著しきを致す、往昔東北地方が聊かも天變地異に接せずして

平穩無事なりし所以のもの亦此裡の數なくんばあらざるなり、反之近時天災地變頻りに臻り東北の民をして或は海嘯に苦ましめ、或は饑饉に泣かしむるもの、蓋し是れよりして愈發展雄飛の好材料を與ふるに外ならざるなり、晚近東北男兒が各種の方面に向つて着々として其歩を進め事蹟大に見るべきものあるを致すもの、偶以て其立證となすに難からざるべし、現時四高に遊ぶ半百の東北健兒、兄等は宜しく自重大に其任の重きを考へ、他日天下の器たるを期し、將來東北の歴史をして光彩陸離たらしめ、一山百文の汚名を滅却し去らざるべからず、當に之れ兄等と俱に努むべきの途にして又吾人の天職たらすんばあらざるなり、

山水の靈偉人を生ず、東北の高山大澤の裏、大才出でずんば遂に國家の前途を如何せん、將來國家の經營は天下よろしく東北の士に委すべく、東北の士たるもの亦自ら其責に任せざるへからざるなり矣、

暑 中 休 暇

露 波

節物勿々として隙行く駒よりも速かなるかな、思へば吾れ爛たる北辰の光明を仰ぎしは去歲卯辰山の秋光玲瓏たりし時にして今や一片の紅葉空しく詩書の間に遺骸を留めて回想轉た遊子の胸を痛ましめ、兼六園裏習々たる東風に匂ひし旭日櫻は數週の昔し雨にうつろひ風に亂れて綠蔭既に濃かなり、噫將に學年去らんとして夏季休暇來らんとす、

夫れ六旬の休暇吾人如何にして暮さんとするか、慈恩温かなる兩親の膝下に兄弟姉妹と蚊遣火いぶしつゝ過ぎにし一ヶ年に吾等が黽勉奮勵の結果得たる所を語り且つ書生々活の洒々落々たるを談するも可なり、綠樹鬱葱たる陰銀球迸る清溪の邊りに若草敷きて一卷の詩集を誦するも可なり、或は我國秀山の粹たる富士の俊峯を七寸の草鞋にて蹂躪するも壯なり、或は我邦麗水の魁たる琵琶湖上一葉の短艇にオールを横へて疾走するも快なり、其他野草漠々古墳累々たる處喬林秀木垂陰幽然たる所に英傑の跡を探り、地理を視察し、動物の採集に、礦物の研究に、山を攀ぢ、谷を迫るの壯遊を試み、以て膽を鍊り足を鍛ふも亦興あり、實に血動き肉躍る青年は活潑なる運動をなし身体を健全にす可きは勿論なりと雖も我國をして崇麗健全の有禮國たらしめんとする抱負と希望とを有する吾等は特に精神の修養を忽せにす可からざるなり、豈に徒らに空過す可けんや、嗚呼世は荒れすさみたる秋郊にも似たる哉、姦邪讒佞欺負の徒の道と呼はり徳と叫びつゝ一世を滔々たる濁流に投じて微笑する魔界にてあるかな、慘憺の景、暗黒の狀、吾人をして戰慄に堪へざらしむ、一走千里天に向つて氣を吐き地に躍つて風を起し白牙を露出して人に迫るてふ暴虎毒蛇は猶ほ絶つ可し、軍馬百萬炮聲轟然山を裂き海を蔽ひ來る強敵も尙ほ防ぐ可し、然れども彼等人鬼は徒らに一代の風潮に讒佞し恣に道德的文字を弄し愛國呼はりをなし自ら誇大を装ひて生ける道德を死せる儀式となし形而上の道德を物質的道德となす其結果國家を口にする者益多くして國家を惟ふ者愈少く忠存を叫ぶもの愈多くして眞の忠孝なる者益少きに至らんとす此れ誠に恐る可きなり、道德の説素より善し忠孝の名豈に不可ならんや、而かも此れ只形式のみにして衷心

より發動せるものに非ずんば生命なき忠孝なり死せる道德なり、噫道德を口にする者愈多く忠孝を説く者日に増して一國精神界の趨勢茲に益非也、凡そ一國の將來を其の青年の趨向する所に依て判することを得、今日の青年にして貧富も我志を動さず生死も我心を撓めず奮然として其の主義と共に倒るゝ程の大信あるもの夫れ幾人かある、所有障礙を横斷縱裁して献身的に世道の爲めに力を致さんとする者果して幾名かある、恐らくは年少の徒の望む所のものは官吏となるにあり教員となるにあり軍人となるにあり、然も此れ官に事を執るの容易なると一定の俸祿に安じ易きと勳章の威かめしきと服裝の美はしきとに依るのみならんや、如上の事たる要するに世人徒らに外的文明に眩惑し奪魂せられて精神上の修養を等閑に附したる結果ならんばあらず、精神修養の事たる其方法に至ては種々ある可しと雖も宗教に依るもの最上の策たるを信ず、或者は云はん宗教の如きは愚夫愚婦の信す可きもの閑人の關す可き事にして活動ある青年の窺ふ可き所にあらず見よ如何に其の様の滑稽に類するかを、それ或は然からん、雲に聳ゆる伽藍の裡綺羅錦繡の美に纏はれたる僧が殊勝氣に焼香し説法し、宏大なる會堂の中胸に十字の印を懸け難有氣に壇上に立ちて祈禱し讚美歌を唱ふ、或は滑稽なるもあらん、然れども如斯きは宗教の皮相にして眞髓にあらず、眞髓と皮相とは形と影との如く相伴ふものにして相距ること天地の差の比にあらず、實に宗教の眞髓は有限と無限との關係にあり、相對の絶對に對する關係にあり、微々たる吾人と廣大無邊の大靈氣と融合せんとするところにあり、然れば則ち一度其靈氣を吸収せんか吾人は吾人にして而かも罪と禍とによりて汚されつゝある吾人にあらず、身は猶有漏の穢身にして而かも

心は清淨界に住み遊ぶなり、豈に其所に惱みあらんや苦みあらんや
將に來らんとする休暇は吾等が精神修養の好機會なり、願くは山を越え谷を涉りて徐ろに長嘯す
る時、或は煙草を喫らす時、或はつまらなき空談をなす等の時を用ゐて、聖書の一頁を誦せよ、一
行の經文を窺へよ、恐らくは、言々字々躍りて吾人の胸奥を衝盪し自ら清き思ひは浮び未來の光
明は輝かん、又雷に之れ心腸の上に刻せらるゝのみならず不知不識の間に吾人が行動に現れむ、あ
ゝ我國現今の弊風を一洗して至高至大の日本帝國を形成せんとする者、云ふ勿れ暑中休暇は晝
寢のみ、海水浴のみ、俗氣粉々たる遊戯のみと

自甘無用臥柴關、鳥鳴花落春晝閑、

良齊

有客來談人世事、笑不應言起觀山、

文苑

月物語 (Bilderbuch ohne Bilder)

紫影

月の語れるを聽け。

時は數十年のまへ、所はコオープンハアゲンにての事なり。とある貧家の窓より内をさしのぞき
たるに、父母は皆眠入りて、小さき男の童ひとり寤めたり。花紋更紗の床幕うちゆるぎて、童は
そこより顔を出しぬ。われは初め壁なる大時計を見るならんと思へり。時計は丹青もて美しく彩
られ、上には杜鵑立ち、下には重き鉛の分銅さがり、磨き輝ける黄銅の振り左右に動きて、憂々
の響をなせり。されど童の目をつけしは、これにはあらで、その下にするたる母が手馴の繚車な
りき。

これこそ家の内にて殊に童の心に入りし物なりけれど、これに觸るれば直に叱り懲らさるゝよ
り、常は手をさしいづくもあらず、母の紡ぐをりは、始より終まで靜にその傍に坐して苧環に
絲のまきつき、車のくるめき廻るを打目成りて、あはれ、われも此車をまはし得たらんにはと、
つくづく心の中に思ひゐたるなりけり。

父母は熟睡せり、童はまづ兩親の様子を窺ひ、ついで繚車の方を眺め、やをら片つつ方の小さき足
を寢臺よりいだし、やがて今一方をも出して、終に兩脚を床にのろして立ちぬ。

尙も父母の眠入れりやいかにと、再び窺ひ見るにいづれも熟く眠れり。足音をぬすみて、短き
襦衣のまきに、繚車の方に歩みよりて紡ぎ始めぬ。

懸絲は輪を脱して、車のめぐることいよ／＼急なり。われは「ブロンド」の髪の毛、青き眼子に
接吻しつ。げにいつくしくうたき容なりけり。

をりしも母親は目をさましぬ。幕はゆれ動きぬ。この様を見出でたる母は小さき化性のものなら

んと思ひて、あなやと叫びつゝ、恐しさに良人をゆりおこしぬ。父は目をこすりて、さかしげに立ちふるまふ童の方を視て、あれはベルテルなるぞといひぬ。

われは廣く世界を見るべき要あれば、この貧しき家より目を轉じて、ワチカアノの美術館を見しに、大理石の神像あまた並び立ち、「ラオコオン」は石に呻吟の聲あり、わが唇を觸れし詩女の胸には心臓の鼓動するを覺ゆ。光は殊に長く「ニイルグルッペ」の巨神の上にたゆたひぬ。

大神は「スフィンクス」の背にもたれかゝりて、移ろひゆく幾百年の星霜を沈思默想するものゝ如く、恍惚としてうち横はり、幾多の小童神は鰐と戯れ遊べり。腕を組みて豊角（フエルクホルン）（角中より花實の叢生せる形にて豐饒の意を標す）の中に坐して、魁偉端嚴の河神（フレスボット）に目を注げる殊に小童神は、纜車を廻しゝ小兒のまみつらつきさながらの生寫なり、此小神像は清新生ける如くなれども、大理石を躍りいでゝより、年の輪は既に幾千度かめぐり過ぎつるなり。此後再びかゝる神像を作りいでんには、恰も彼の貧家の小兒が纜車をまはしゝ如く、天地幾回か轉し去らざるべからず。

そはともあれ、爾來春秋幾たびか推移りぬ。昨夜われゼエランドの東岸なる入海を臨みたるに、木立をかくし丘陵聳え、赤色の障壁めぐらせる物ふりし屋形、鵲群（クビキ）れ遊ぶ外濠、さては高塔聳ゆる小市邑、果樹園の木の間よりすきて見ゆ。篝火たける無數の小舟鏡なす入江の水に浮べり。この火は鰻を捕ふる料ならで、儀式の爲に設けたるなり。樂の音響き、歌の聲起りぬ。一小舟の中央に人々のあめめかしづく長身強健の偉丈夫腫子（ヒミ）青く髪は白く且長きが、外套を被て立てり。

あゝわれ彼を識れり。ワチカアノの「ニイルグルッペ」を初め、自餘の石神像、さては短き襯衣きて纜車の傍に立ちしベルテルの貧居など一時に吾心に浮びいつ。

あはれ乾坤の大車輪旋轉若干回、今や新に大理石より顯神（ワッシガミ）の作り出されたるなりけり。

ベルテル、トオルワルドセン萬歳の聲、數多の舟よりとよみ渡りぬ。

（ベルテル、トオルワルドセンは有名なる璉馬の彫匠、一七七〇——一八四四）

悶えの鶯

梅村

山家育の鶯が富てふ風に誘はれ、黄金なる樹の其下に平和の夢を結ばんと、か弱き翼たふさつゝ、朝には音色ゆかしくもろ共に歌ひける村の小川也、夕には月をまもりて夜もすがら親しき言葉交はしける里の小山にも、別れの涙を注ぎ、鎮守の森を伏し拜みさきはへ給へかし神々よ、と念じつゝ、新玉の年立ちかへりて日を重ぬる十日あまり人は未だ屠蘇の香失せず新春の夢醒めざる頃、住みなれし我故郷を後にして旅衣日も暮れ果てゝ宿なきを惱みつ泣きつ悶えつゝ、隠れては現はるゝ里の燈火に望の光たのもしく、幾夜旅寢の假枕、重ぬる數も六つ七つ、あかし暮して程もなく越の重鎮尾山城下に辿り着きぬ、時しも冬の最中なり、見亘す限氷の野雪の山只白皚々の其上に亂れ落つる雨に衣をしぼり、或は花と散り來る吹雪に袖拂ひ、又は玉飛びちがふ霰に身を打たしなど、旅の憂事嘗めつくし疲れに疲れし我身にしありければ、餓ゑたる者は食を撰ばず、寄邊

なぎさの流れ草ひかれて何を否まむや、ゆくりなく誘はれて翼休めしは某の機織場なりき。あら喧しき糸繰る音や、耳も裂け腦も破れんばかりにて風に琴弾く松が技や月に奏づる小流のゆかしき調は今いつこ、糸はもつるゝ心は亂る、さても騒がしきよすが哉、黄金なる樹とは何處ぞや、眼ばゆき光は何れにや、来て見ればさ程にもなし富士の山、實に人の舌程頼み難きものはあらじかしな、否とよ否とよ人をも身をも怨みじな虎穴に入らずんば虎子を獲じ騎虎の勢止みがたし、遮莫石臥し土魂横はる山を穿てば黄金の出る例あり、何をか躊躇せん、いで此機織場を暫時住所と定めて黄金の光を胸に飾り懷に滿てむ哉、あはれ、此一念、後日あたらず清き己が姿を塵に染めむとは黄金の光に眼眩みし我の露知らざりけりな、己が自ら造れる空想の世にのみ住める我の企は流るゝ水の泡ならで淡くも消れて沈み行きぬ、あゝ人の思のかくも果なきよと嘆つ今はの運命に沈淪せむとは神ならぬ身の知るよしぞなき、空しき想と露知らで末を樂しみ笑ひける其聲は、聽て我身に注ぐなる涙を招く聲とは知らざりき、懷へば愚なり、何をか求め、何をか喜びし、ああ空なれや、夢なれや、

月は臙に花は淡紅、花月の親はいよこまやかならむとする一夜、我に業務の劇しきと周圍の空氣の汚きとにより、身も心も塵に染み憫にも寢れし顔の青白きを花の紅顔月の豊頬に比へて、ありし昔を嘆ち今の悲運に泣き、併せて心の汚点身の穢に悶えては良心の刃に胸を痛め、はては水村山郭碧玲瓏の巷に逍遙ひし昔の我の面影を追ひつ慕ひつ、思の窓に倚りける折しも誰が歌へるにや

何を言ふても山家の鳥とや見捨てられ、見すてられては耻かしや、山家育の鶯が来て云事にや、東を向いても宿がない、西を向いても宿がない、梅の木小枝を宿として、花の荅を枕とし、落つる木の葉を褥とし、星月をがんで法々華經となぐ、

を、しほらしの歌なれや、嘗ては我も斯の歌中の鶯たりし事もありしものをと、我身によそへて聞く耳は歌へる人のそれならでいと異様にぞ響くなる、あゝ解し難し、我は何が故に渠の歌中の鶯たるにて満足せざりしにや、香はしき梅の小枝をよすがとし花に座し葉に寝ねて月澄み星淡き其夜の夢を結び難しと嘆ちしはそも何が故なりしか、思は古に飛び還り、暫時我にもあらで耳傾くれば、餘音嫋々たる悲調淒音絶ゆるが如く咽ぶが如く嘆つが如く低く怒るが如く高く風につれつゝ窓に訪るなりけり。

あゝ懷へば三月の前、此機織場に身を寄せし時は誰をかも知る友にせんすべもなく、山だし、と嘲り笑はれて小雨降る夕、空黒き曉、口惜殘念の涙にかきくれて袖をかみしめながら入相の鐘を聞き曉の鳥の鳴く音をば耳にせし事もありしに非ずや、或は友ごちの浮きたる事に心を狂はし身を亂しゝを目にしては噫汚はしと遙に山青く水白き故郷の空に心を馳せ足もあはやかかけいでんとせしには非ずや、又病に臥せし其折に、寝ながら糧は口には來らぬよ早々起きて働きねかし這般の病に何をか惱めるいざ起きよなど、口きたなく枕上に罵りはては足を舉げて頭を蹴りし主の後を睨みて無念骨髓に徹し枕を投げて立ちしが、脚は蹣跚、仆れて夜具を抱きて此世の地獄と咄ひし事もありしに非ずや、さるに今の己はいかにぞ、思ふもなか々々に淺ましき哉、まして口に出

して語らるべきものは、あゝ止みぬる哉、止みぬる哉、今や昔の我は何れの邊にかある自由なる純潔なる素朴なる我の影もなし、浮世の塵にて身を染め、清きを汚きに習はせて、山だし、の無垢を隠し山家育の嘲笑を避けんとせしは將又何が故なりしか、あはれ自由自在天上天下唯我獨尊の我を捨て左に觸れ右に衝り仰げば塵せらるゝ籠中の我を求め、空は紺青、草は緑に、花は紅、自然の美に飾られし我家を出で、煤の天井、芥の疊、土塊の壁、の陋屋に身を屈せし事の愚さよ、あゝ或は潺々と不斷の音樂奏づる里の小川に再び此姿を映すべき資格ありや、又かの常盤かきばに變らぬ心現せる綠彩る里の小山に吟じける昔の聲は今いつこ、映すも昔の姿にあらざるを如何にせん、歌ふも塵の中より出る聲なるを如何にせん、あゝ昔の影、昔の聲、杳として今いつくあな悲し耻かし、人や見ると思はずもあたりを見まはせば春に浮き立つ身を踊らせて

櫻花はど氣高いものも落ちりや木の葉の下になる

と舌も足もしごろに謳ひ行くものあり、さてもさき／＼の浮世なりけり、酒をのみて花に浮き立ち、蝶々の姿と飛ばして行くもあれば、涙を啜りて悲の底ひなき淵に沈む石と身を横へて、浮ぶ瀬のなきに嘆く涙の乾る間なきもあり、彼と我身とかはればかはるものかな、さりながら亦よく彼歌は我が運命を謳へる事よ、そも運命程奇しきものはあらじ、それ光れる朝露めてながら花の臺に謳ふ音は聽て凋む夕顔痛みつゝ賤が伏屋に泣く音となり、昨日迄酒盃に浮べる月の君を金殿玉樓の美に賞せしを今日は溢るゝ涙に影とめて埴生の宿のいふせきを嘆つに至るも、皆これ運命の奇しき手のなす業なり、されば萬の物此怪手より免るものあるべきやは、斯く悟を開けば悲も憂も

なければども念を斷ちて斷ち切れぬは人の情、泣かでたかるべき事かは、まして執多き我身のいかで物を悲まざるべき、然りながら時めく花の姿もとはに美しく榮ゆべきやは、落つれば木の葉の下になることはよくも言へる事にて我身の運命に似通へる哉、それにつけても我里の入口なる小川の岸の邊に年々歳々花異なれども其艶其美は更るなき櫻の一本を想ひ浮ぶなり、げに月は皎々として風颯々、玉兔波に踊り花は流を彩る夜なりき、此櫻樹の下にて小川と共に聲合せ

あゝ花よ花汝はしも、天然爛熳清淨の塵なき心其姿、とはに變はるな花よ花

緑の山に抱かれて、瑠璃なす水にかしづかれ、此塵外の山里に、生れし汝の幸多き

土の香臭き野の花と、塵の世人は嘲かれと、我等は崇めむ汝が身を、春の女神の化身と

あな汝はしも汝はしも塵ふかき里に生れなば、濁れる空氣肌に觸れ、玉の姿はくもるらむ

浮れ男は汝が身を酒のむ料と眺めては、汚き戀の息をかけ、汝が聖を穢すらむ

あゝ汝出づな人の世に、我は小川ともろともに、伏して仰がむ汝が顔、抱きてすはむ汝が頬と歌ひし事も昔やな、夢なれや、我身は何處塵土の、渦巻く中に彷徨ひて、花に歌ひし其聲は泡にも等しき夢語、今の我身を思ひては花にあはす顔もなし、あゝ如何にせむ、如何にせむ、悶ゆる胸の遣る瀬なさ、血に泣く思の杜鵑、誰か哀れと夕鳥、只かあゝと鳴き暮し、母様如何に父上如何に、春雨ならぬ我涙、空も曇りて見えわかず、そぞろ故郷の慕はるゝ、思へば耀く胸の鏡に、映れる郷里の我家に、登る烟のいと細きを見れば、誰か腕を撫で黄金だにあらばよと泣かぬものやはある、まして、まして、たらちねの眼は遠山の薄かすみ、頭は峯の白雪や、五十路の坂

は一昔と、見かへる齡の身にありながら、まだ浮世の事にかゝつらひ糧に心を悩まさるゝ、姿を眺むる我眼、いかでか黄金を慕はずやは、あゝ黄金なり、黄金なり、之ありせば日ねもす夜もすがらつらき思の胸に燃えんや、かゝる境遇に生れし我身なれば一途に黄金と思ひつめ、意馬心猿の狂ふに任せてかくは塵の巷に彷徨ひ出てぬ、されば黄金なる木と人に語られて何でうためらふべき、まして山家育の我身のなごてそが塵の巷とはつゆ得知らんや、思ひまはせば己が身の穢、心の塵、を只すらに己れのみに訴へむや、こは只我過にのみには非じ我迷にも非じ、他が我を汚ししなり、世が塵の巷を作りしが爲なり、塵だに拂はれなば誰が塵に汚れんや、さりながら世は我等を汚穢視し墮落の標本淫蕩の化身と卑下輕蔑するとは理なき世なる哉、己れ他人を汚水腐溝に投げ入れて、而も其人不潔なり去るべしと言ふが如し、あゝ誰か其暴に怒らざらんや、其滑稽なるに笑はざらんや、自ら醜を造りて醜を厭はゞ初より醜を作らざるに若かざるを、見すや、泥水湛へたる池を、そこには紅蓮白蓮の美花微笑むにあらずや、花唇に含まれて風のまに／＼来るなるゆかしき香は薫らずや、窈窕たる花のたてる下の不潔なる故をもて直に花は全く汚しと言ふべき理あるなるや、あゝ同情なき世なる哉、殘忍なる世なる哉。

さりどて我をして此運命に漂はしめしものはそも何ものによ、懷へばそれ黄金に非で何ぞや、慾望に非で何ぞや、然れども黄金の燦爛たるもの無かりせばいかで慾望の起らんや、黄金の光は人を盲になすものなり、と云はれしは實に宜なり、されど眼なければ黄金の光も見ず智なければ黄金の貴をも知らざるものを、不幸にも兩眼を飾られて思ひもよらざる苦を見、知らざる悩を知れる

哉、黄金が惑すにや、我が迷にや、我が知るにや、彼が教ふるにや、さても奇なるは我なるもの哉、我なければ何をか怨み、何をか泣かむ、罪もく苦もなからむを、

あはれ黄金を得んとして塵を得て身は不潔とて世に容れられず、さて我は何處へ適くべき、世は廣しと雖我には狭くぞ覺ゆれ、月日はそも誰が爲に照れる、あゝ寄邊渚の捨小船、友失ひしはぐれ雁、漂ふ先は泥海か、飛び行く方は黒雲か、たより少き我身哉、天を仰げは一流の隕星月を掠めて西し、一朵の妖雲今將に玉兔を呑まんとす、花も泣けるか露を宿し風がもて来る鐘の音はいと悲しげに最後の運命を告ぐるが如し。

わか宿のいけの藤なみ咲きにけり

山はさくさすいつか來なむ。

信吾田中翁碑銘 代緒方某

村上 函 峯

信吾田中翁。歿之明年。故舊同人。相謀建碑。以余知翁尤深。郵寄其狀。請銘。乃按狀叙之曰。翁諱溫。稱發次郎。後改信吾。號球外。加州小松人。本姓湯淺氏。考稱木堂。妣武部氏。翁其第二子。出冒田中氏。襲謙齋翁後。幼而岐嶷好學。弱冠游大坂。師事家嚴洪庵先生。讀蘭書。講醫方。研精匪懈。舉爲塾長。居七年。業成而歸。本藩擢班醫員。尋任侍醫。慶應元年八月。任醫學教師。首建議曰。方今醫學漢洋並立。萎蕤不振。宜新設醫藥與病院。以招良醫於外國。因陳泰西

醫學情狀。言極適切。藩主納之。相地卯辰山。與聲稱養生所。使翁督之。明治三年一月。徙之大手街。稱醫學館兼病院。四年一月。朝廷徵之。翁曰。効力於父母之邦。即所以忠於朝廷也。再徵不就。聘致蘭醫須魯伊氏。翁與之戮力。醫學大闡。及藩廢。規畫齟齬。翁在中區處維持。其致今日之盛者。翁力居多焉。九年八月。任金澤醫學校長。兼金澤病院主務。未幾轉富山病院長。兼醫學所教長。新起土木。大其規模。是以生徒益進。請治者廩至。遠邇翕然稱之。十二年十月。復金澤醫學校長。兼金澤病院長。聲譽益隆。會以下與當路者議不合辭免。於是與同志謀建尾山病院。自爲院長。北陸有私立病院。防於此。翁於治術。積經驗。其因症施治。奏功如神。每有三人訪病者。必曰。田中先生謂如何。其見信類如此。車駕北巡。至金澤。賜金褒之。前後爲金澤醫會長。醫事協同會長。効力醫學者。不可勝紀。明治三十三年一月二十三日病歿。享年六十四。葬於小立野天德院。配清水氏。生一男三女。男曰千里。今爲大學生徒。女皆嫁人。翁容貌魁偉。美鬚髯。氣宇磊落。音吐如鐘。談論明晰。一座傾聽。師弟之間。重禮節。苟有過失。面折不假。改則止。人服其雅量。傍好詩善筆札。翁尙志氣。其言行事業。一以氣貫之。唯其氣。故能成其始。成其終。嗟乎此其所以爲翁也歟。銘曰。

不爲良相 則爲良醫 翁於斯詰 果能得之

父母之邦 永賴其利 貞珉雖泐 遺德不墜

慶櫻村尋常小學校新築序

櫻陵散人

夫國家之治具固多矣。而教育尤爲重。教育盛。則人智由是開。倫理由是明。工藝由是起。制度由是立。而教育廢。則人智爲之暗。倫理爲之敗。工藝爲之衰。制度爲之亂。故國家之盛衰興亡皆係焉。然而欲興教育。則唯在教育者之精勵。與校舍之完備耳。我村有所鑒焉。聘老鍊師。徧喻兒女就學。普通教育之完全。可期而待也。小學校開校以來。未經十數年。卒業者既及千數百人。俊英亦不爲不多。今也本校駸駸乎益隆盛。生徒加多。殆無立錫地。蓋是雖由鄉民之教育熱心。抑亦非教育者得其人。何能至此哉。自去歲偶諮新築議於村會議。衆咸贊之。乃乞圖案于文部省。卜地久壽禮。鳩良材。招巧匠。起工於十二月。日夜精勵。閱月凡八。功費五千有餘金。而不以爲多。役工三千五百。而人不以爲勞。其位面成一字形。結構堅牢。採光之法。換氣之便。皆得其宜。自天皇御真影之庫。以下藏書之房。器械保存之室。運動之庭。無不具備焉。至今茲辛丑七月竣成。乃卜某日。舉新築祝賀式。嗚呼本村諸賢。實明教育之要。明教育之要者。所以益國家之富強也。豈可不慶哉。方今我邦文化旺盛。天子頒教育詔勅。以使國民知忠孝之可重。又施行小學校令。將以振起教育也。然觀其內部。則有其實背其名者。苟有教育之責任者。不可不發揮忠孝之道。以遵聖旨矣。本校既教師得其人。校舍亦完整。奉職本校者。豈可不勉哉。

老梅歌

櫻陵散人

老骨蒼。老骨剛。老骨高操自清揚。半身斃。半身銳。半身枯槁花却麗。偃蹇蟠屈虎又龍。冰肌仙姿高士容。霜雪壓花花不怖。氣稜稜分木中宗。請看槎枿老梅樹。其操千古鐵石固。

詩書披來坐香風。高唱一篇廣平賦。

櫻花

同

瓊姿玉貌冠群倫。桃李海棠何足珍。晴奪晚霞千瓣色。陰疑煙雨萬株春。淡紅微上芳山夕。潔白深籠嵐峽晨。西土牡丹非可比。自然正氣日東新。

初夏幽居

同

春去無人訪。幽莊最有情。鷺飛前浦雨。鵲叫後山晴。新樹章章綠。殘芳片片明。讀書宜淺夏。簾外手風清。

漁夫

同

此身敢不渡。紛紛世俗灘。人間無上樂。不如漁夫安。冬則宿水海。春則掉花灣。清風一葦舸。明月四面巒。垂綸趁呂尚。賦詩學船山。素情元不在富貴。好將風流打一丸。

納涼

露波

八幡橋上寂無聲。月映江波分外清。懊惱吟魂天地景。不知深賞夜三更。積水漫々接碧天。月華皎々四山鮮。此樓今夜風塵外。松籟驚濤氣凜然。虫吟唧唧夜沈々。燈暗佛前月影鹽。法侶未歸禪室靜。石牀枯坐洗濃心。

懷友

同

地塘風動綠陰深。天際雲閑落日沈。別後憶君無恙否。簷前千里望烟岑。長空雲白水蒼々。客枕飛來夢一場。不盡書中千里思。莫忘清淨佛陀光。

磯の夕暮

秋風

遙なる岬の角を

帆をはりて泊に急ぐ

濱邊には人影たえて

を舟しも波に咲き出て

松が枝に雲もゆるがず、

夕陽にはこる海の花なれや。

みぎにはは亂れし藻くす

紅や黄や露ぞきらめく。

眞砂地は血潮にもえて

さくら貝さざ浪にちる、

紫の浮雲まよひ

あゝ清き磯の夕よ

青巖に浪うつところ、

我れ酔ひぬ青春き命に。

鷗鳥滿ちくる潮に

羽をふるひそよやとびたつ。

わらべの歌

三

郎

夕陽さす遠沖つ邊に

春の村里

たゞ一つ漂ふ島は、

遠山雪は消えねども

春の野の花の褥に

野に草つまむ春は来て

眠りたる少女に似すや。

雲雀の聲も長閑なり

櫟林に日は照りて

里の小川の水車

たゞゆるやかに廻りつゝ

遠き山寺の鐘の音に

思をのせし夕まぐれ

雲は東に走りしも

われ知るらめや君やむと

春の野

春の野に行け里の子よ

よべ夢みたる風ふきて

風は上らむ空高く

君やめりとな、いたましや

楊柳青き川づゝみ

袂に輕き風吹きて

藤のむらさき濃紫

水にうつろふ昨日今日

春の野に行け里の子よ

もちぐさ生ふるかたへには

げんげの花も咲きたらむ

春雨一たびすぎ去れば

樹々の緑のますがごと

君かへりませもこの身に

松影婆娑たる月の夕

君が小琴に我醉はむ

病める人に

雨

聲

緑なる野の水の岸

紫

影

五月雨に訪ふ人もなき我宿の梅の實落ちて晝しづかなり

朝顔の種まきをへて家に入れば小雨ふりきぬ暮れかゝる庭

をなさ兒の丈くらべこし竹の子の見あぐるばかり早もなりにき

紀の國の雲たち迎へ津の國の雲ゆるぎいづ茅渚の海づら

いとし子がしはぶき病のしば／＼もしはぶく見れば胸ぞ苦しき

夏のうた

其

月

なか／＼に花の頃より過ぎうきは小雨をばふる葉櫻の蔭

この花に緘して着けん其かみの若武者ゆかし垣の卯の花

畝傳ひ疲れてかへる早乙女が後ろ手淡く月いでにけり

うちむれてかへる子等追ひさ／＼かにの蜘蛛の子散らす晝の村雨

さ／＼舟をうけて遊びし幼な子が影だに見えず降るや五月雨

うらわかき蓮の巻葉に風見えて夕涼しき池の邊のやど

蛇が棲むと里人おづる山中の池青みわたり鶺鴒の鳴く

名なし草

潮

東

渡し場の途をし問へば村少女答へはなくて柳ゆびさす

繪馬堂の茶屋の軀の物語あはれと聞きぬ梅さけるやしろ

その始めやさしと聞きし梭の音も文讀む窓のかたへ騒し
時鳥啼く音きこえて篠原の首掛松に月落ちかゝる

花のせていさゝ小川をさゝ舟の行くへやいづこ蝶に追はれて
雛抱きて母をまねべるをさな子の夢まごかなる乳母車かな
をさな子が晝のつかれにうまいせし袂を出づる土筆蒲公英

あけぼの

秋風

春の宵戸に倚り人を待ち居ればをぞや小櫛の落ちて碎けぬ
白梅の馨る青磁の花かめに日影ぞにはふ春の朝窓

うつし世の戦の征矢に傷負ふも神のゑまひになほも進まむ
枕邊に蘭の香清き春の宵ふととり出でぬ詩の卷

なつかしき夢よりさめし夜のまごひ小窓の梅の香えならぬ
踏分くる我世の路のさかしきに何を救の杖とすがらむ

もゝ花は笑みぬ小草はもえ出でぬ春の潮の胸にみちくる
一たびは袂つらねて花もつみきいまはたさびし野邊の夕川

雉の聲西に細りてさびしくも花野にそゞう曉の雨

かげろふ

紫浪

鑿を手工匠か仰ぐ鈴羯羅の半成像に灯かげゆらめく

背は曳きて妻は後かし子は上に荷車一つ春の野をゆく

田螺なく山田は月の陰にして畑より田への水音更けぬ

夜は静か月は十六夜朧なり畑の中道人かたりゆく

山行けば山の幸あり海行けば海の幸ありこの世たのしき

幼調

麥雨

をばしま
欄干に倚る公達の舞の袖花ちりかゝり春もくれゆく

御硯の蓋にゑがける曲水に花ちりかゝる夕くれの空

老い行く春

傀儡

行く水にまかす花びら三つ五つ秘めるなさげのなかりけらすや

わが宿の庭の小川に影見せて咲きこぼれけり山吹の花

懐故郷

柳操

かたわれの月沈み行く山の端に故郷人のたも影にたつ
さらでだに戀しきものを故郷の山の端近くかたわれの月

○

紫影

打水や椿の若葉つやゝかに
打水の竹のしづくや金魚鉢

えせ者の茶湯するなり舟遊
舟遊天神橋を溯る
篋の黄色く見えて若葉かな
市中の若葉青葉や鯉幟

○

花に明け菜種に暮れて旅衣
すれちがふ伽羅の香や櫻人
永き日を鸚鵡と語りて夕かな
世に遠き山の木挽や日の永き
鶯の餌をとりかへる日永かな
病床に歌よみて永き日なりけり
鯉鯉真鯉浮いて沈んで日の永き
門前に羅苧やと語る日永かな
草鞋かへて更に六里の日永かな
衣かへしうまいの稚子や膝の上
衣かへて下駄にもものうきあぶら足
灌佛の小寺を出で、鮮の店

潮

東

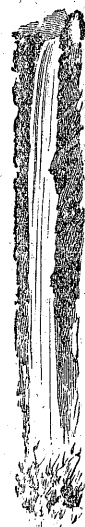
取りかはす鮮や棧敷の隣り同志
釣人の去つて鮎飛ぶ夕曇り
掛香の大磯ゆきや思ひもの
目高来る流もありて杜若

○

K、N 生

大寺の屋根葺いてゐる日永哉
砂濱に小貝を撰む長閑さよ
七島は霞みて海の入日かな
塩田の砂きらくと春日哉
砥の桶の水温みけり普請小屋
雛子なくや溪を隔つる五戸の村
地虫穴を出づれば鐵道線路かな
馬にして蛇うち拂ふ山路哉
石磴の苔滑らかや落椿
塀盡きて小さき橋あり夏柳
別荘の塀築いてゐる若葉哉
幼子の帶しめてやる裕かな

賣れのこる桶の蜩や暮の雨
青柳や蜩を分くる五六人
鳩多く下りたる屋根の春日哉
鳥雲に入るや五山の夕太鼓
傘さして能見る人や春の雨
傘を干す楊屋の庭の牡丹かな
三千の牡丹に燭す奢りかな
花桐の雨や二條の古屋數
御手洗に鳩の來て居る草葉かな
藁屋根に生木干しけり柿の花
卯の花に鰯顔出す日暮かな
温泉の宿に酔を吹かるゝ若葉かな
城跡の崩れやぐらや雲の峰
瀧近き石の佛々若楓



雜報

本校紀念日記事

梅花既に辞し去りて櫻花初めて滿發、九十の春光將に之れよりして盡きなんとす、校庭幾百の

とせんや、例により十八日午前八時式あり、校長官命を帯びて京にあり今井教授代りて其辞を代讀す、

櫻花は早咲既に七分の盛を過ぎ、落英繽紛とし

本日ハ第十四回紀念日及第十二回種樹日ノ佳

て衣袖を打ち遊子をして轉た壯快の情に堪へざ

辰ニ相當シ茲ニ此ノ式典ヲ舉クルハ余ノ大ニ祝

らしむ、去て兼六の勝區に遊べは滿園皆是櫻樹

スル所ナリ

ならざるなく、百歩にして之を觀れば、白雲の

抑紀念ノ式ヲ行フハ創立ノ當時ヲ忘レズシテ益

天空に湧起するが如く、千歩にして之を望めば、

其事業ノ擴張隆盛ヲ計ルニアリ回顧スレバ本校

紅霞の亂峯に蹙蹙たるが如く、近いて樹下を徘徊

ハ明治二十年四月十八日ノ創設ニシテ其當時ニ

せば、淡紅濃白談らんと欲するが如く、歩に

在テハ教育ノ氣運未タ今日ノ如ク大ニ開ケス爲

從つて人に媚び矯姿言はん方なし、此好期に際

メニ其創立者タル故森文部大臣ヲ始メトシ前田

して本校創立紀念日到る、吾人の歡喜因より知

侯爵其他有志者ノ經營苦心ノ狀ハ實ニ想像ノ及

るべきのみ、此に於てか盛に之を祝して大に其

フ所ニアラザリキ爾來年ヲ閱スルコト十有六其

旨に適はんことを期す、豈に吾人の本懷ならず

間多少ノ沿革ヲ經テ年毎ニ向上前進シ以テ今日

ノ現況ヲ呈スルニ至レリ

種樹日ハ明治二十五年當時ノ教授大島多計比古氏ノ建議ニ基キ爾來毎年教職員及學生諸子相繼テ之ヲ施行シ今ヤ構内到處ニ大ニ繁茂シ數年ナラズシテ鬱蒼タル森林ヲ現出セントス其樹木ハ數百種ノ多キニ至リ學理研窮ノ上ニ大ナル資料ヲ給スルノミナラズ常ニ校舎ノ美觀ヲ添ヘ又夏日ハ炎熱ヲ遮リ冬日ハ寒風ヲ防キ實ニ偉大ノ功アルヲ見ルナリ

今試ニ此種樹日ニ於テ種栽セシ所ノ樹木ノ數ヲ點檢スルニ松、梅、榊、櫻其他諸種ノ樹木ヲ合セテ凡ソ千三百本アリ或ハ苗木ノ性質不良ノ爲メニ枯死セシモアルベク或ハ寒暑害虫ノ爲メニ萎縮セシモアルベシト雖モ其大多數ハ能ク成育シ能ク繁茂シ業ニ既ニ用ヲ爲スモノアルニ至レリ又本校創立以來昨年末ニ至ルマデノ學生ヲ調査スルニ入學セシ者二千七百七十四人卒業セシモ

ノ七百七十七人帝國大學ヲ卒業セシモノ二百六十七人内博士ノ學位ヲ受ケタル者一人病氣又ハ事故ニ依リ退學セシ者及死亡セシ者六百五十二人退學及除名ノ處分ヲ受ケタル者百三十七人ニシテ其多數ハ恰モ彼ノ樹木ノ蔚然トシテ繁茂成育セルカ如ク既ニ國家有用ノ材ト爲リテ百般ノ事業ニ貢獻シツ、アルナリ

願クハ諸子宜シク彼ヲ思ヘ此ヲ考ヘ益其志操ヲ堅固ニシ愈其品行ヲ慎ミ以テ世間幾多ノ害物ニ誘惑セラル、コトナクンバ遠カラズシテ各其志ス所ノ學業ヲ成就シ以テ國家有用ノ材トナルコトヲ得ベシ是レ諸子ガ本校創立者ノ德ニ報ユル所以ニシテ亦先輩者ノ志ヲ繼ク所以ナリ

余ハ諸子ト本日ノ喜ヲ共ニセント豫テヨリ大ニ期待セシ所アリシガ遽カニ上京ノ命ニ接シ此ノ式場ニ列席スルヲ得ズ仍テ聊カ書面ヲ以テ祝詞ト余カ諸子ニ望ム所トヲ述ブルコト斯ノ如シ諸

子幸ニ之ヲ諒セヨ

明治三十六年四月十八日

第四高等學校校長吉村寅太郎

尋て教職員及生徒諸氏の寄附樹木の報告あり式全く終ゆ、

昨年の例に倣ひ當日運動部各部の競技あり皆獨得の長所を發揮して勇壯活潑、吾人をして近來稀に見るの盛況を呈したりき、斯くの如くして、時鐘六點、尋時の晚鶉漸く喧囂、尾山城邊暮色蒼然として到り、閃々たる星光碧空に瀾散し俗文學者をして碧板に黄金の釘頭磷々たるが如しと歌はしむるの好春膏、吾人が當日の最大娛樂場として期待せし大茶話會は本校控所に於て開催せらるる事となりぬ堂の四壁は白地に赤四條を染出し辰章を備へたる幔幕を繞らし、桁椽を蔽ふに垂柳を以てし櫻桃李杏の秀花其間に交はり、正壁には時習寮の寄附にかゝる紀念日の三

大字を點綴せる大額あり文字落款額地皆豆類より成り色彩の配合實に其妙を極む、塲中照らすに二箇のアークライトあり光力共に三千、柳絮緑を展べて百花香を放ち、春光融々して堂に滿ち詩人ならぬ我すら金城春濃辰章校とても呻吟したき光景たり、委員諸氏の苦心經營蓋し淺少ならざりしなるべし、堂に滿つるの健兒は正に六百、委員長今井教授起て開會の主旨を述べ、

尋て本間教授委員總代として各種の報告をなし校長の祝電を朗讀す、終て高橋教授は教職員總代として登壇したり、温平たる容貌既に吾人を敬服せしむるものあり、先生惇々として説いて曰はく、今日學生の意氣消沈せるもの蓋し權利義務の感念欠乏せるに起因するものなりとし權利義務の重んぜざるべからざるを述べ、英國民が一厘一毛の物質的權利と雖も之を主張獲得せんが爲めに千金を費して吝まず、能く其主張を

完からしむるもの必竟彼等の權利は英國民の權利一部にして則ち亦英國々權の一部に關連せるものなりとの觀念に基けるに起因せるものなり、今日一般我社會が些々たる物質上の權利は、之れを得んが爲めに多大の勞力を消費するは、却て之を棄つるに如かずとなして省さるもの遂には獨立自存の道を損傷するの階梯たり、故に學生たるもの須らく此理を知悉して權利の重んずべく義務の貴ふべきを考ひ獨立自存の道を講せざるべからず、之れを遂行し能はざるの學生は則ち意氣なきなり、近來學生の活氣なきものは全く之れが因たるに外ならず、諸子旃を勉めよ、聊か以て祝詞に代ゆと、嗚呼吾人は日常先生の篤學に服する者なりと雖も、今亦斯の理義整然而かも優麗なる說話を聴き轉た敬慕の情禁する能はざるものありき、次て本校第一の雄辯家近藤達兒氏生徒總代として壇上に立つ、風采凜乎

として好箇の辯士たり、急霰の如き拍手の遏むを待つて徐ろに口を開いて曰く、今日の紀念日は吾人をして一日の歡を得せしめんが爲めに好名目の下に業を休むものにあらず、本校創立の當時を考へ、變遷の由來を知り、創立諸賢の旨に適ひ愈益隆盛を來さん一の刺激劑たらしめんがためなり、然るに余輩今日母校の現狀を見るに士氣士風地を拂ふて空しく恰も新郎春閨の夢に飽くことを知らざるが如し、豈に嘆せざるべけんや、此を以て吾人は屢秃筆を叱して北辰紙上に私見を吐露せしこと再三猶未た寸功なし、今日の會合の如きは私見を紹介する最良の機たりとして滔々辯し來り、現時の學生が活氣なきこと昔日に比して甚たしきを言へ、吾人は宜ろしく之れが振興の途を講じ以て創立諸賢の厚意に酬いざるべからず、然れども余輩は歲既に人生の過半を経過し來り、日暮れて道猶ほ遠きの

境遇にある老書生、潜越の罪を犯してよく此言を爲すと雖も、到底其任にあらず、之れ一に年少氣銳の諸兄の當に盡すべきの職責にして、不肖兄等に囑するの最も切なるものなり、祝詞に代ゆるに私見を以てし敢て不遜の罪を犯す、請ふ幸に恕せよと、氏の快辯は實に稀に見る所に於て一種の魔力を有し滿堂の人をして傾聽するの止む能はざるに至らしむ、抑揚頓挫眞に其妙を極めり、論し來りて老書生云々の一段の如きに到つては圓轉骨脫人をして覺えず感歎措く能はざるものあらしめたりき、繼て餘興に移り例の美髯家として、名物男として、滑稽家として、其名校内に高き熊田直忠君獨特の妙技によりて手品を行ふ、觀者をして顎を解かしむること正に十三分二十秒、多田氏の吟聲は朗々として梁上塵埃飛び、行雲脚を遏むるの概あり、小泉氏得意の棄兒の舞は此の吟聲によつて更に一段の

巧を加へたり、小泉氏舞ひ終るや美髯瘦身の士劍を按して毅然として現はる何ぞ知らんや之れ佐野教授ならんとは、曉々獨吟舞ふて曰はく、天聽寂無音、蒼々何處尋、非高亦非遠、都只在人心、と詩は是れ碩儒精理先生の作、舞吟は是れ佐野先生獨特の技拍手喝來湧くが如し、尋て巧妙なる理化學應用西洋手品あり、二部諸兄の催はしに係るものなりと雖も、前置きの口上といへ、御手際といへ、歸天齋正一の輩をして徒跣逸足せしむるの趣あり、講談師松平某の大石良雄幼時の有様を談せしは流石本物、何を言ふても張扇子にて鼓き上げたるだけあり、三寸の舌頭巧に英勇を罵倒し、七寸の扇子よく天下を翻弄して轉た壯快に堪へざるものありき、其他加藤氏阿部氏の琵琶歌孰れも切々嘈々として錯綜よく調に適ひ、盤上玉を轉するが如く歎賞せざるものなし、餘興漸く終るて茶菓の饗應あり、六

百の健兒大言壯語、肝膽相開いて談笑し歡樂盡となり次に競射となる
くる所を知らず、時に時計十一時を過ぐる既に
廿分、依て委員長今井教授の音頭にて天皇陛下
の萬歳を三唱し、次て第四高等學校萬歳を三呼
して散會す、

弓術部春季大會

新緑五月の天我運動場全盛の時は僅に數日を餘
まして將に過去に葬られんとす、竹刀の響は擊
劔道場を驚かし叱咤の聲は柔道々場に轟き庭球
野球さては大野河邊勇壯なる端艇大會既に終り
而して我弓術部大會は之れが殿として五月廿三
日午后一時弓術道場に開かれぬ校長職員來賓以
下部員續々出席先つ一手禮射あり射は固と己を
正うし禮を守るこそ其本意なるに近來射術勃興
すと雖ども射禮猶未だ盛ならざるに我校諸子の
茲に注目せられしは斯道の爲め大に賀すべきこ

部員点取五手競射 (尺五的)
第壹等 大和田信吉
第貳等 上杉
第參等 神谷吉兵衛
第四等 松橋好次郎
第五等 白井清
第六等 野口政秀
第七等 生井洸
第八等 橋本四郎
第九等 横山芳松
第拾等 瀬戸國次
以上受賞者中神谷橋本の兩氏は本校第一流の射
手にして能く肩比するものなく當日は特に尺二
的にて競射せられ其得点敢て他の射手に遜色な
きは大に多とする所なり兩氏幸に自重せよ
來賓職員点取五手競射 (尺五的)

第壹等 職 楠 先生
第貳等 來 水 郡
第三等 來 久 田 督
第四等 來 中 條
第五等 職 中 野 先生
楠先生は我弓術部の師範にして進退作法能く古
禮に合ひ射れば乃ち的中其得点より二割を減す
るものなは第一位を占む敬服の外なし

三學校撰手五手競射 (尺的)

第壹等 一中 楠 正 路
第貳等 高 野 口 耕 一
第參等 一中 堀 末 松
第四等 高 神谷吉兵衛
第五等 一中 横 山 登

三校とは醫學專門校石川縣第一中學校及び本校
とにて各五名の撰手を出し互に競射したるもの
にて弦の音矢の響き射中て射外し一勝一敗觀者

手に汗を握る其結果例年勇勢なりし醫專撰手の
賞に漏れし其遺憾思ふべし

本校各部撰手三手競射 (尺的)

第壹等 二部 橋 本 四 郎
第貳等 二部 横 山 芳 松
第參等 三部 野 口 政 秀
第四等 一部 上 杉
第五等 一部 生 井 洸

各部各四名の撰手を出して競ふ皆左袒赤手を振
ひ弦音高く切て射る中りて拍手狂喜さるゝ者あ
り外れて苦笑考ふる者あり終に以上の結果を得
たり何れの部勝りて何れの部劣れる乎記者は劣
部の反省を乞ふ切なり

終りに餘興として先づ源平競射あり紅軍三本の
勝ちを得たり源平兩軍中東矢したる者は楠先生
宮川先生、來賓吉田某、野口耕一、堀末松、横山芳
松、白井清の七氏なり次に出席者一同の金的片

矢競射ありしが、的中の名譽は横山芳松氏の手に歸せり。同氏は我弓術部には未だ新進の士と雖も、名聲頗に高し。記者は氏の熟技を賞すると共に、益奮勵せられんことを願ふものなり。右終て賞品授與茶菓を喫して散會せしは、夕陽海に入るの頃なり。き尙委員の語る所によれば、部況益々隆盛近來大に射的の張替に忙はしと、是れ部員の増加に因るか。將た伎倆の上達に因るか。何れにせよ、弓術部の爲め、北辰會の爲め、慶賀すべきことなり。

圖書室雜感

▲我校に圖書室の設備があるのは、職員生徒一般に取つて實に結構な事である、若し此設備が無かつたならば、進歩を渴望する人々は、どんなに苦しむであらうか。計り知るべからずである、

▲僕は今こゝに注意を願いたい事を、少し書かうと思ふが、辛抱して讀み終つて貰いたい、

▲歐米の公園等に花折るべからず等の禁札が掲

げてないのは、一般人民の公德が進んで居るから、斯種のものには必要なのである。そう、して見ると、斯種の禁札があるのは、やがて人々に公德の念が缺けてゐる證據といふべきであらう、我圖書室には、悲しい事には、喫煙談話音讀を禁ずといふ札が貼つてあるから、前の筆法で行けば、之は我校生徒の公德が缺けてゐる證據とすべきであらう、然り圖書室に於ける多くの生徒が公德に缺けてゐるのは、疑ふべからざる事實である、冬季暖爐がある時稀に見る外、室内で喫煙する者を見た事は、無く音讀する者も、絶えて無い様であるが、談話に至りては、常の事である、これより猶ひどいのは、歩行及び戸の開閉である、殆んど全ては室内を歩む事廊下に於けるが、如く靴の音を立て雪駄を曳きづつて、讀書子をして一時書を閉ぢざるを得ざらしむる、更に戸を開閉する時は、誤つてか故意にか、知らないが力を入れて押しやり爲

めに轟然たる響は、四邊の窓硝子を振はしめ、はては理を究めてゐる人を驚かし、折角の考も破られてしまふ様な悲しい事となる、これ等は實に公德を缺いた甚だしい者と謂つべきであるまいか、己を抓りて人の痛さを知れだ、かりに位置を換へて考へて見給へ、實に沈思熟讀する人に取つては、迷憾此の上はない、萬一圖書室の構造が悪い床には毛氈を敷き戸には開閉の際音せぬ仕掛をせよと言ふ者があつたら、そんな奴の面に唾してやりたい、

▲僕の友芹舟の話に、彼まだ中學に在つた時に、某誌が轉載した逍遙遺稿の一部分を見、その血あり涙あるに感じて、どうかして其全部を讀みたいものだとの望を起した、早速東都の友人に其由を告げた所が、其答にあれば、非賣品であるから、廣く分配する事は出来ないものだ、と有つたので、思ひつめてゐた芹舟落膽して、急にふさぎ込ん

だ、其後當校に來て圖書室を見舞うて計らず、逍遙遺稿に出逢つた時の嬉しかつた事といつたら、實に譬ふべからざるもので、有つたといふ事を聞いた、年來忘れ難かつた書を見付け出した時は、天へでも登つた心地がしたであらう、最も次第である、然し斯様な事は、獨り芹舟にのみ限らない、苟も讀書を好む連中には、きと味はれた事であらう、

▲僕にさへかゝる經驗は、屢々あつた、僕は一種の讀書癖を有してゐるといふものか、中學時代には圖書室の設もなかつたし、勿論自分でドシドシ買ひ求める資力もなかつたから、僕の書籍を渴望してゐた事は、丁度蛙が曇天に雨を欲してゐる有様であつた、然るに當校には圖書室の設備が稍完全してゐるから、之を見た時の僕の嬉しさは、恐らく芹舟が逍遙遺稿を見付けた時にも劣らなかつたであらう、

▲然し世の中は甘い事があればまた辛い事もあ
るもので僕は圖書室の完備を喜んだがまた失望
落膽して悲しい目に逢つた事も度々あつた、そ
れは何といふに、芹舟が逍遙遺稿を見付けた様
に僕の讀みたいと願うた書を申し出て多年の本
望遂げむも今こゝだ腹の中で大に勇み立つと
豈に計らむや、其書は職員某が借りて行かれた
との事を聞いた、此時の僕の失望といつたら御
話にならなかつた、數日の後更に同書を尋ねる
とまだ返つて來てゐなかつた此時は平生に似ず
僕は立腹の餘り申出書を引き裂いた、

▲僕は圖書室が職員に對して特別の權利を與へ
てゐるのは是非もない事だと承知するが、一昧
其特權を濫用する人の御心が知れない、僕は敢
て特權を濫用する者といふ、借りて行つてから
二週間は何時の間にか過ぎて一ヶ月となり更に
二ヶ月となり遂には一學期間も返さないといふ

仕末を見ては全然特權を濫用する者と言ふて少
しも差支は無い、それも生徒が平素參考にもし
ない物なら幾分恕すべき點ありとでも申し度い
が、生徒が讀みたがり見たがる物を獨りで占領
してゐるといふに至つては何とも申し様も御座
りますまい、人は僕の言を無禮といふかも知れ
ぬが決して左様でない、却て向うが無禮だ、

千把一束

(命也)

太陽の下に一も新しきものなし、同じものが幾
度か様を替へて繰返さるゝに過ぎず、新しきを
喜ぶは人の常なり、されど事にふれ物に出會ふ
毎に、新なりとして之を驚嘆するは、新學無定
見の證のみ、
道人は敢て奇矯を求め新奇を銜ふ事を好まず古
來ありふれたる謂はど陳套の文字を臚列せん、
併かも其故なきにあらず、

我郷黨に一漁夫あり、若き時颶に會ひて米國に

長所は短所也とは之を謂ふ也

漂着し、米國製の錐の頗る銳利なるに驚き、一
個を購ひ歸國して後之を試むるに、其鈍なる事
又全く別物の如し、よつて大に其何故なるかに
惑ひしに、漸く解する事を得たり、もと錐其物の
利なるにもあらず鈍なるにもあらず、唯米材と
日本材とは鬆緻異なるが爲なりと、今の世西
洋錐を買ふもの唯に此漁翁のみならざるべし、
世に馬鹿なる野心を持てる人間ほど賤むべく否
寧ろ憐むべきものなし、文章家辨舌家思想家乃
至運動家など人々に推されんが爲に、いやにそ
れの臭味をふり撒かんとするもの多し、是等は
重に才子肌の輕薄なる無腸漢也、乘氣も之より
來り氣取も之より生ず、人をして彼等の眞意那
邊にあるかを思ひ且其人格をも疑はしむ、自己
の長所を圓滿に發揮するは可也、されどいやにそ
れの臭味を振撒かんとするは更に大に不可也、

是等の輩は虚榮を冀ふ徒也、何の思考もなく何
の顧慮もなく、眼前に愚人の喜を買はんとして、
後に偉人の笑を招く事を悟らざる痴漢也、賤む
べく憐むべきは實に斯点に存ず、味噌の味噌臭
きは上味噌にあらず、徒に自ら估らんとする事
をやめよ、梅花は闇中吾人の鼻を撲つにあらず
や、如上の野望は猶恕すべし、如何となれば其
本尊が神聖なるものなればなり、茲に別種の野
望あり、別種の望は何ぞ、曰、卑むべく厭ふ
べき己むなくんば不義なる方面に因せる野望是
也、是等の卑屈汚穢なる心に驅られて、斯道に
豪を闘はし覇を稱して傲然たるが如きは抑何等
の不埒ぞや、學生墮落の聲漸く喧しきは蓋所以
なきにあらず、可忼而慨、
現時の日本には随分裸体に燕尾服的人物多し、
實業家も政治家も僧侶も學者も教育家も見事な

る燕尾服を飾るも上着一枚をこれば則裸体也、一世の識者を以て目せられ一代の指導者を以て擬せらるゝものにして往々斯の如し、學生と雖社會の裡に游泳す、豈獨り清き事を得んや、然りと雖斯申譯は學生墮落に對する一片の情實としては聽くべき全く墮落の責を拒否するに足るべき理由とはならず、老頹腐朽自ら持する能はざる徒は最早濟度を價せず寧ろ天大の箒を以て之を掃除するの簡なるに如かず、青春陽々の士に向つてかゝる荒療治を施すは道人の忍びざる所也、愛する青年よ三度思を致して正に反れ、爾曹に責むる事の嚴なるは爾曹に囑望する事の多ければなり、

邯鄲少年無遠圖畢生唯羨む處は何ぞ、

氣魄なく抱負なきを以て世故變通を知れりとし卑俗下鄙を以て世態人情に熟せりとなし氣骨を以て人間最大の禁物と心得泣べらざるに泣き笑

ぶべからざるに笑ひ娼妾の徒すら尙且潔とせざる所を敢てして慚死する事を知らず、吁、斯の如き徒尙且呼吸と脈搏とを有せる乎

由來青年は沸血的彈力的のものなり、慷慨激越孤劍を彈じて泣き、悲壯淋漓口角沫を飛ばして談ず、畢竟年少にして氣を負ふものゝ常也、未だ必ずしも善なきにあらず、

優柔不斷虛飾無氣、脂の如く韋の如く、些の抵抗もなく彈力もなし、打て苦を知らず撃て痛を感せず寥々之音鏘々の響得て聞くべくもあらず、肉塊五尺生けるか生けるにあらず死せるが死せるにあらず、

中道を得てこれに與せずんば必ずや狂乎猖乎、

道人は寧ろ前者に與せんかな、

顔色の憔悴容貌の枯槁を辭せず日夜營々として倦まざるものは何故ぞ「學んで儲けて樂まん」是四高六百の健兒が唯一の志願ならんば、幸甚、

修養とは何ぞ蘊蓄とは何ぞ進路方針、咄、爾何物ぞ、右往左往只其任する所に行かん困厄に際せば天下の廣き誰れか吾を助くるものなからんや、途中時に財布の落ち居らざるを保せんや、と當世の才子の襟度豈吞氣ならずとせんや、

チオゲネスの響に倣ひ晝中提灯を提げて市中に徘徊する事三年なるもセルフ、メード、マンたらんとする青年を見出さん事は那翁再生するも猶且不可能事と叫ばん、

自己の手腕によつて自己の天地を開拓するは豈丈夫の本懷ならざらんや、自己の天地は自己の手腕によつて開拓する底覺悟と抱負とを持せる輩が生存競争の圈外に放逐せらるべきは普通の結果必然の理數のみ、

薄志弱行の徒が激甚なる競争の大渦中に立つ能はずして、比較的競争の余波の及ばざる亦經濟的影響少なき——併かも名目の立派なる——閑

散の地に蟻集蟄伏せるを見る毎に一種輕蔑の念と一種慙憐の情とを禁する能はざるなり自然淘汰の法則は決して道理なき同情と慙憐とを有せず、記せよ、天は自ら助くるものを助くる事を、

よしや山芋は鰻となるども、素、人は天分定めり、金は金、銀は銀、銅鉄は飽くまで銅鉄也、人は各其天分を自覺して忠實に確實に勇往猛進すべし、寄生的蔓草術根性は事をなすに當ては最大の禁物也、

金銀銅鉄をして各其天分を尽さしめ亦自ら其天分を全くせんせせば、須らく至誠謹嚴に眞摯熱烈ならざるべからず、千尺の地底に埋れる金あり、草蓬の間に時勢の否塞を嘆せる偉人ありとせば、こは吾人の損失也社會の不幸也亦其罪也、一坏の土が富嶽の大を致し一掬の水が琵琶湖の深を致すに至る、吾人眇たる一介肉と雖社會の一

員たるを失はず、否、將來に於て社會を形成すべき卵也雖也、而して懷疑冷笑の社會には懷疑冷笑の人物歡迎せられ、眞摯謹嚴の社會には眞摯謹嚴の人物歡迎せらる、是れ熱誠謹嚴なれと云ふ所以也、至誠熱烈にして始めて正當に自己の天職は自覺せらるべく亦實行せらるべき也、誤解する勿れ、道人が茲に至誠謹嚴なれとは密網に跼蹐して張らんとする鵬翼を收めよこの義なりと、東坡謂はすや、深く治せざるは治する所以也と、孔夫子亦謂はすや、過ぎたるは猶及ばざるが如しと、盆栽の美と野花の美とは到底同日の談にあらず、諸子幸に安せよ、道人は牛を殺すまでに角を矯むるものにあらず、呵々、熱烈なるは可也、されど余りに涙脆く感情強く亦余りに運命的かるは大に不可也、事々物々感情の奴隸となり、涙を横溢せしめ、右に觸れ左に中る毎に吁天哉命哉と呼ぶ如きは、自重なき

證也信念なき符也、狹量の結果也、一蹶起つ能はざる徒也、雄大なる人物として有爲なる國民としての飛躍には堪へざる也
山は落々水は滔々、直に取つて以て男子襟度の表章となすべし、笑ふべくんば大に笑ひ泣くべくんば大に泣け、何ぞ徒に涙を要せんや、況んや天哉命哉と呼ぶの要あらんや、造次顛沛の間悲運逆境の裡にあつて所謂悠悠化に乗する底慰安と信念とを把持せば則足矣
イカルスの如く身に翼して飛ばんとするものはイカリアン海の名と共に笑を後代に貽し、天体をのみ望みつゝ行くものは遂に井中に墜つ、畢竟人間は二足動物なり、歩々蹈むべきを見て蹈み進むべきを見て進め、さりとて四足動物にあらず、終身匍匐して地面のみを睥視する勿れ、天際のみを望んで叫ぶものは狂也、地面のみに執着して匍匐するものは痴也

附

録

羽咋一泊行軍記事
第七回 水上大運動會記事
春季 端艇命名式及艇庫落成式記事



附 録

羽咋一泊行軍記事

一週日の春季休暇短しと雖とも、親に背く者は

急ぎ飯りて自ら其膝下に箒掃の勞をとり、兄弟

と昔を語りて共に慈親に事ふるあり。或は短褐

輕鞋飄然として山川を跋涉し、古英雄が墓の塵

を拂らひ、古戰場を尋ねて昔を忍び、或は花陰に

軟草を布き晏臥して古人を友とせるあり、今や

等しく校に歸りて英氣勃勃雄心落々たり。時に

は半宵臥被をはねて蹴起長劔を彈じて北天を睨

し、時には沸々鼓鳴する髀肉を撫して無聊に苦悶

す、此英氣此雄心いかでか發する所なからむや。

時なる哉、控所には羽咋一泊行軍の揭示は翻れ

附 録

り、待ちに待ちにし健兒は沸くが如き歡聲と拍手とを以て此を迎へぬ。

四月十三日午後一時、吾校運動場に於て隊伍の編制を終へて嚟曉たる喇叭の吹奏につれ大隊運動を行ふ、英姿爽快、威風堂々、校旗翩翩として春風に飄り、劍影閃々綠陰に映しぬ。此際爽快何ぞ極まらむや。

左に當日の部署を記さん。

統 監 部

統監代理

部 員

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

今井省三

中野嘉作

高橋郁治

長屋順耳

赤尾直松

山田喜久良

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

同 部

大隊本部

大隊長

副官

旗手

書記

同 部

磯田正謙

熊田直忠

園田三郎

飯森梅一

及能謙一

深く遺憾とする所なり。

發す。

從來他の學校に於ては誤りて禦杖を發射し負傷せる者少からず爲には不幸生命に關せるものさへあるやに聞く我校には是迄には幸にも

而して兩軍に關する特別方略は更に演習地に於て分與すべしと。

此の如きことなかりしも此際諸子は尤も深く此に意を用ゐられんことを切望す。

午前八時喇叭唳々校門を出づ、隊伍整々威儀堂々、校旗朝風に翻り豪壯の氣高く天を衝く。

云ふ迄もなく我校は北陸最高の學校なり、されば至る所諸子が一舉一動は皆人の矚目して

路傍の人皆歩を止めて微雨の中を歩武肅々たる貔貅を聲を吞んで目送す。九時大樋郊端に又銃少憩して北陸街道を津幡に向ふ。

己か範とする所なれば深く謹まざるべからず、希くは諸子嚴肅兵規に従ひ能く幹部の命を守り、苟も我北辰校の面目を毀損するか如き行爲なきを期せらる可し。

折から雨愈烈しく戎衣を浸し道路泥濘脛を沒すれども、吾校健兒皆赴々たる武夫、王命一たび下らば身命は辞する所にあらず、姦佞境を犯さば劍を撫して立つもの何ぞ雨を恐れむ、軍歌洋々津幡驛に着きしは正に十一時、雨尙止まむ氣色もなし。

茲に於て磯田大隊長は進みて一般方略を授く、曰く

一般 方略

一、北軍支隊は七尾灣に上陸中なり、南軍支隊は之れに當らん爲め四月十五日朝金澤を

驛外にたちて東北の天を仰げば、雲煙模糊たる間に何とはなく威容嚴たる俱利伽羅岳を望む可し。源平の昔木曾義仲が平維盛の大軍を破りし

古戰場なるは云はすもがな、今我等征途にして

豪壯ならすや。

此遺跡を望む、感慨久しからさむとするも得られむや。

鉄路に沿うて敷浪を去り、松林に従ふて行く折から雨も晴れかゝりぬ、道芝に置く白露も足に心地よく樹梢を碎け落つる零露の熱したる頬を打つもいと涼し。約五丁にして全軍街路に又銃して憩ふ。

○瀛 車 行 軍

茲に午食を終へ、午下一点七尾鐵道に搭じて北に馳す、車中雄心高く鼓するを覺えたる戰士は快談壯語に玻窓を振はしぬ。

やがて大隊の中第二中隊は北軍として先づ發す、時既に一時五十分柳瀬新保を経て粟生の北端に至れば左側の砂丘嶺に開け所々松林の鬱々たるありて大軍を掩蔽するに足る、依て吉崎大隊長爛眼此を察し茲に軍を駐めて北軍支隊として受けたる特別方略を示しぬ。

○北 軍 防 禦

鐵車轆々高松驛を過ぐるやいつしか白沙青松の中に入りぬ、此邊一帶桃實の産地にして麥隴新緑の間を綴るに桃花の艶紅を以てす、時には一望皆紅桃、等しく雨を帯びて搖雲飄飄たり、さすがに征衣の身ながら簾に梅花を挿せる風流の遠き昔を忍ひて胸中の琴線高く鳴るを止めあへぬも少からざる可し。

午後一時瀛車敷浪驛に着く、砂丘青巒蕭々たる微雨の中に温乎として吾人を迎ふ、今や半千の丈夫此間に劔戟を取つて戦はんとするなり、豈

北軍支隊特別方略

一、七尾に於ける支隊本隊は未だ上陸を終ら

す。

一、此上陸を掩護するの任務を有する歩兵一

大隊は分れて杉野屋及羽咋附近にあり。

一、情報に依れば南軍支隊は金澤を進發するに際し歩兵約一大隊を急行羽咋方向に派遣せしものの如し。

大隊命令 (四月十五日午後二時
於羽咋町北端高地)

一 情報に因れば敵の歩兵約一ヶ大隊敷波村に來る。

二 當大隊は目的を達する爲め北進中の敵を羽咋南端高地の線に於て拒守せんとす。

三 第一中隊は杉野屋附近に在て禦守す可し(仮想)。

四 前衛中隊(第二中隊)は羽咋南端の高地を占領して死守すべし。

五 第三中隊は第二線、第四中隊は第三線となる可し。

六 予は羽咋南端の防禦地に在り。

注意

一 赤旗一本は一中隊を表す。
一 櫓杖の取扱に留意すべし。

次に交戰中左の口達命令を下す。

第三中隊は左翼高地に第四中隊は右翼高地に各増加せよ。

大隊長 吉崎 佐次郎

尙注意して曰く

夫れ兵は退却するを以て敗とする者にあらす、唯その命せられたる目的を達するを得ればたとへ背進するも勝利といふ可きなり。今我軍が南軍を制肘しなから背進して七尾灣に味方の上陸を可成容易ならしむ可きを以て目的とす、故に諸子血氣の勇に走せず十分幹部の命に遵ひ沈着にし敏捷なる活動をせられむことを望む。

やがて日覆は各兵の帽を飾り彈藥は分配せられぬ、軍中隻語なく壯士慘として期する所あるか

如し今や唯部署の命を待つのみ、司令官亦多年

硝煙彈雨の境を驅馳せる者胸中奇計妙策沸き來り、成算既に掌中にあるものゝ如く自若として布陣を命ず。時に二時二十五分。

先づ粟生村端街路の右側獨立家屋の蔭に一分隊を散開しなほ左側松林中にも三四士を伏さしめ、敵兵を發見せば射撃を續け此が進行を妨げつゝ後方部隊に加はる可しと命ず。玆より尙は羽咋に向ふ事約四五丁にして又三分隊を道路の左右兩側に伏せて敵を制せしむ。尙進むこと五六丁又一分隊を鐵路の右側松林中に潜ましむ。殘餘の二中隊一小隊三分隊(内二中隊は標旗)は羽咋町の南端唐戸山の北方丘上に伏せて敵を待つ。かくて北軍の壯夫等たとへ南軍懸軍長驅して我を攻むとも我に險害に據るあり、奇計の慮るべからざるあり、しかも嘯りて止まざる健腕あり、南軍の孺子何をかなし得んと意氣昂然たり。

○南軍進撃

此より先北軍の發するや、磯田大隊長は副官旗手を從へ審判官として隊列を離る。

二時三十分、南軍(第一、第三中隊)は日下大隊長の指揮の下に集合しぬ。尋で本日の演習に關し審判官より南軍支隊特別方略を授く

南軍支隊特別方略

一、南軍支隊は金澤を發するに際し歩兵一大隊を支隊の行進に關せず急行七尾街道を羽咋に向つて前進せしむ。

一、情報に依れば、敵の歩兵約一大隊は杉野屋及び羽咋附近に出沒す。

右終りて日下大隊長は左の命令を發す

大隊命令 (四月十五日午後二時三十分
於 敷波)

一、敵は羽咋及杉野屋附近に出沒すとの情報を得たり。

二、當大隊は此に向つて七尾街道を前進す。

- 三、第一中隊を前衛に任ず。
- 四、第二第三第四中隊を本隊とす。
- 五、第四中隊より側衛一小隊を本道の北方に派遣して海岸に沿ふて行進せしむ可し。
- 六、余は本隊の先頭に在て行進す。

注 意

一、敵は帽に日覆を附す。

二、赤旗一本を一中隊と假標す。

直に第一中隊前衛として先づ發し、次で總軍警戒行軍にうつり羽咋に向ふ。尖兵よりは斥候を四邊に放ちて林陰堤下を隅なく物色せしむ、警戒をさく／＼怠なし。道路は南より北に馳せ右側は万頃の田畝麥隴を隔てゝ微雨にむせぶが如き連山に對す左方は白沙丘にして稚松千態万狀海風に琴聲を洩らす、満目の景象清新の氣漲れ武夫昂然奮ひ立ちぬ。光兵粟生に達せりと覺しき頃、銃聲轟然敵兵の發見を報じぬ。茲に於て全

軍勇氣凜々威風堂々、鐵腕をたゝいて曰く北軍險害に倚り奇策をめぐらすとも何すれぞ長驅破竹の勢を以て蹂躪せざらむや。指揮官亦泰然北天を睥睨して立ち既に期する所あるが如し。

○唐戸山の激戰

今や陰雨いよ／＼繁く暗雲益重し、四顧漠々として劍聲鏘然銃梢森然たる間自ら殺氣の天地に滿つるあり、慘憺たる修羅の巷將に目前に展開せられむとす、壯心胸裏に漲り勇氣勃々禁す可からず。三時五分一發の轟聲寂圃を破ると共に南軍の先鋒は北軍の殿軍と衝突しぬ。すはや時こそ來れと奮闘激戰馳騁縱橫南軍の一中隊道路右側松林に散開しぬ、北軍此を制しつゝ後方部隊に加はりて又も烈しく防戰す、茲に接戰少時北軍徐々退却しなから鐵道線路踏切の前方約六十米突松林に據る、南軍も漸々散開して約六百米突前面の森陰に布陣す、第一中隊の左翼に第

三中隊第一小隊を延線増加して今や戰鬪線漸う長し、然れども持重して容易は進まずかくて合戰漸く烈しく硝煙あたりを罩め砲聲四邊を震動す、北軍も小勢ながら茲を前途と防戰してさしも鋭き寄手を惱ましぬ。時既に三時二十五分。』やがて北軍は徐々松林桑畑を縫ふて退却しぬ、南軍此を追ふ事頗切なり、三時三十分北軍は等しく協力して唐戸山の北丘に陣し、南軍は街路を進行し來りし本隊も左側松林に横隊を成せるが尋で散開して其南方小丘に據り、小谷を隔てゝ互に睨みあひたるぞ勇ましき。

今や戰機大に熟し北軍も茲を死地とし巧に身を茂林に潜めて防戰し、南軍亦茲を抜かではと激戰愈旺なり、白煙漠々天爲に暗く腥風切りに人ふ襲、砲聲轟々天柱折れ地軸砕けんとするか如し。折から南軍の一隊道路を越へて左側を衝かんとするとの報北軍に達すれば、此は由々敷

大事なりとて一個中隊と一個分隊（赤旗一本と實員一分隊）を派して此に當らしむ。

戰機益々急を告ぐ然れども兩軍奮迅咄嗟力戰奮闘生死を堵して互に退かん様もなし。兩崖硝煙漠々電光閃々轟聲殷々、今や敵も味方も全力を盡して瞰制し。激戰其極に達しぬ。

茲に於て南軍の士意氣鬱勃をさゆべからず、日下大隊長憤然高丘に立ちて最も敵に接近せる左翼枝隊に突撃の令を下しぬ。

折から南軍の左翼に陸離たる劍影の閃くあり、すはこそ敵は寄するぞと北軍も着劍して此を待つ、火力既に極に達し砲聲漸く沈まんとする時、南軍左翼一時に呼號して突撃す。北軍亦喊聲雷の如く硝煙彈雨を冒して此に應ず。全軍此に奮ひ立ちて今や突撃して劍戰相接せんとする刹那、突如休戰の喇叭嘹唳として戰場に響き渡りぬ。砲聲劍響一時に靜まりて雨滴の音俄に耳染

を襲ふ。

磯田審判官折からそぐが如き強雨の中に全軍を集中し兩軍大隊長の決心を聴取して、講評を下す、時に四時三十分。曰く

例年の事ながら審判官の人員少數にして十分なる觀察をなす事能はざりしかば、其批評も多く一部分に關し全体に亘りて詳細ならざるは遺憾とする所なり。

自分は多く南軍の方に在りしかは、北軍に就ては兩軍衝突以後を知るのみ。

南軍に就て述ふれば命令報告の傳達は先づ不可なきものゝ如し。

南軍前衛中隊、即ち第一中隊の多くは警戒行軍より戰鬪開始に至るまで終始雨覆を脱ざりしは甚だ非難す可き事と考ふ然し本隊の方には一般に此注意ありしものと見へ一人もかゝる不都合を見ざりき。

一般に小隊長以下幹部の行動稍沈着を欠きたるやの嫌なきにあらず、爾後充分の注意あらんことを望む。

北軍が南軍に對する處置并に陣地の撰定先つ適當にして敵軍を制肘しなから退却するにも其機を失はざりしは同意すべきことと思ふ。」兩軍兵力の排置は共に其當を得たるものと信ず。

決戰陣地に於ける北軍の右翼即ち南軍の左翼に對する所は北軍の弱点なりしに、南軍の早く此を認めて一部突撃も此地点に試みしは適當のと考ふ。然れども北軍の一個中隊と一個分隊とに當るに南軍か一個中隊と一個小隊とを以てせるは果して其功を奏せしや否は直に斷言し難けれども地点の撰定に就ては南軍の爲め同意を表し置き其奏功如何は兩軍射撃の熟否及志氣の振興如何にも關する事なれ

は之は諸君と共に考究の問題となし置かん。」

本日は開戰より休戰迄絶へず降雨ありし爲、銃の發火せざるものありしは甚だ遺憾なり。

然し此強雨にも憶せず各其分を盡し其職を全ふせんと勉められしは自分の大に満足に思ふ所なり。

講評終り

講評終るや、雨脚愈繁く雫滴顔を打ち帽檐より襟に落ち脊を濡はし征衣しぼるが如けれとも一人の苦を叫ぶ者なし。歩武肅々として羽咋に着し。豫て設營部員が定め置ける宿舍に重き脊囊を下せしは正に午後五時三十五分。

演習中其壯觀を見んとて雨を冒して廣集せる人々山の如く傘と傘相連りて野に満てり。羽咋町より數名の警部巡查を派して雜間を制しぬ。

着后大隊命令を發す

大隊命令 (四月十五日午後五時
於羽咋町南端)

一、大隊は本夜當町に宿營す。

- 一、着後武器裝具の手入終りて當町内に限り午後八時迄散歩を許す。
- 一、診斷五時三十分。
- 一、人員檢査八時三十分。
- 一、午後九時命令受領者を出せ。

以上

此夜羽咋町は吾校半千の武夫が快談壯語に大に賑はひぬ。明日の天氣を氣づかひつゝも晝間驅馳の疲勞に矛を枕といつしか寢入りぬ。半夜夢を破られて枕をもたぐれば軒の點滴斷又續。

(秋風記)

○出 發

半千の精英昨夜の夢や如何なりけむ。今朝起き出づれば昨日の空を拭はれて、梢の露曙天の光を宿して閃めく。

四月十六日午前七時幾分全軍宿舍前に集合す、曉風戎衣を吹いて氣自ら澄めり、號笛一聲、佩劍鏘々、歩武整然として長蛇の軍は動き出せり。目指す所は金澤の地、進む所は昨日の道、全軍の心少しく快ならざるものあり。等しくこれ一條の道なり、されど、昨の雨の中に見たる所と今の晴空に眺むる所と、豈に其趣を異にせざる無けむや。

羽咋の郊端、沙丘幾連、青松蕭疎たるあたり、これ昨の戦場なり。砲聲起り白煙昇り、紅白の旗翻る所倏ち一隊の黑影顯はる、大雨傾注して服を透し、爆聲殷々として雷と轟く、あゝ旦に紅顔を堂上に誇り夕に白骨を沙礫に暴せる者、それ幾何ぞ、路傍一莖の花、そも誰がむくろより咲き出でけむ。

途に粟生村を過ぐ、小學校あり。或は手或は顔に墨を飛ばしたるまゝ走り來る者十數名、其容

貌人をして抱腹せしも、或者は手を舉げて歡呼せり。或者は額を鳩めて私語せり。あゝ彼等何の考ふる所かある。彼等と我等と相去ると眞に僅、今にして思へば彼等如かりし我等は實に樂しかりき。春は里の小川に目高すくひ、秋は裏の山に菌採り。鳥の聲蟲の音に歌は思はざりしとも、自然の胸に懷かれては、邪の望も名譽の願もあらざりしよ。

午前九時敷波に着き、またも身を氣車に投せり。松原を縫うて走り去れば、高松驛のあたり桃の花今日も麗はし。身を委ぬると一時間、津幡驛にて車を去る。停車場前に大隊長兵を閲し終れば、行軍旗の中は挟みたる長蛇の軍再び動く。昨、雨中悄然として語なく、時々長息を洩らして頗る困憊の色ありしもの、今は雄心勃々抑ゆべからざるものあるが如し、其歩むや軽く。軍歌は唇を衝いて出づ。天は晴れ道は坦、行軍

斯の如く安きは稀なり。

奇は求むべからずとも、沿道田野の景また將に詩人の一顧に値すべし、左は數頃の圍を隔て、丘陵南北に連り、丘陵の上松樹の間時に櫻花の點綴するあり、頭をめぐらして右を望めば、菜花麥浪相連ること萬頃、粉蝶香裏に舞ひ、其將に盡きむとする所運湖は鏡の如く鷗波に浮ぶ。』津幡を去ると僅に里余、利屋町村にて中食す、時午に至らざると一時間。

○演 習

休憩一時間は談笑の中に過ぎ、磯田大隊長衆を集めて告げて曰く、昨日の演習に於ける一般方略及び特別方略は今日の演習に何等關聯する所なし、今日の演習は極めて確實なる動作を爲す目的にて先づ孤立の大隊か若干の敵兵に對して警戒行軍及び攻撃を實施せんとするにありと。既にして第一中隊の第一第二小隊は假設敵とし

て宮川中隊長に率ゐられて先づ發す。時正に午。敵は既に去れり、本隊の士腕を扼して隊長の下令今か今かと待ち焦るゝ程に、喇叭の聲勇ましく集合の令あり、やがて大隊命令は下されぬ。

大隊命令 (四月十六日午後零時三十分)
(於利屋町村南端)

一 情報に依れば敵は森下以南に於て陣地を占領するものゝ如し

大隊は當面の敵に向つて前進せんとす

二 第三中隊は前衛に任す

三 第一第二第四中隊を本隊とす

四 衛生隊は本隊の後尾より五百米突に大行

季は千米突に在て跟隨すべし

五 余は本隊の先頭に在て行進す

大隊長 磯田 正 謙

午後零時四十分第三中隊前衛として日下中隊長の指揮の下に出發し、次餘の隊伍之に従ふ。

假設敵は小數の斥候に敵の前進を認むるや直に

退却すべきを命じて之を南森下村附近に派す。また彌勒繩手鐵道踏切の西に一個小隊を留め敵の襲來に對して發砲すべきを命ぜり。更に南下して深谷溫泉場に至るべき道路の分岐點に一個小隊を留め敵を見て直に退却すべきを命ず。さて前衛は今町村端より斥候を派して敵の所在を偵察せしめつゝ進む中に、敵は彌勒繩手に在りて我を撃たむとするものゝ如しとの報を得、全軍の士氣爲めに振へり。間もなく敵を前方踏切の邊に見る、前衛本隊は其二個小隊の兵をして道路西側の水田中に開散せしめ、一撃の下に此敵を追ひ拂はむとす、時正に午後一時をすぐると五分、今や第一の火蓋は此處に切られたり。衆寡の勢如何ともし難く、且つ敵は己が受けたる命を守り交戦數分ならずして退却す、前衛は之れより道路の左右に兵を散じて進む。道路の東側に小丘の突出するあり、直立したる丘腹には荆

棘繁りて攀ぢ難きのみか、頂には松杉雜木の蔭いと暗く、眞に兵を配して敵を防ぐに足るべし。前衛は殊更に警戒を加へて之に近づけども、敵兵更に動くとも見えす。果して敵は彼處にあらざる乎、若し然りとせば敵の據る所は彼よりも更に峻にして、天與の要害容易に近づくべからざるものに非ざる乎。斥候は報じて曰く、彼處には敵の隻影だに無しと、本隊の將士不安の色なき能はざりき。果せる哉敵は守るに易く攻むるに難き好地形を占め居たりき。柳橋村の東丘陵起伏する所則ちこれ。

敵村端に一個小隊を伏せてわれの襲ひ來るを待つ。さきに彌勒繩手に於て敵と初めてまみえた一個小隊等は息を切つて退却し來り、等しく村端に踏み止まる。衆を頼みたる本隊の勢には勇士の陣も支へ難しと見えたり。敵の一個小隊は退いて村の東なる丘陵に登る、本隊の兵勢は

乗じて村舎の側雜木の下を縫うて馳せ來り、見る間に其數を増し遂には延びて長蛇の横ふにさも似たり。今敵が據る丘陵は孤立のものに非ずして、丘陵また丘陵相連りて窮る所なきものなり。第一の丘陵は一面菜の花畑にして黃羅綠莖目さむるばかりに鮮かなりしも、忽ち修羅の巷と化し去りては、砲聲天地を動かし白煙四面を閉ぢこめて、たゞ黑影の其の間に馳驅するを見たるのみ。敵は能く戦ひ能く支ふ、彼等は此丘を枕に戸を暴して長く勇士の名を留めむと願へる者とかばし。さはれ衆寡の争ひ難きを奈何せむ、彈丸に中るは敵も味方もかはらねど、新しに富める本隊が一隊退けば一隊進みて少しもひるむ色なきに引きかへ、敵の様は憐れにて、兵は斃れ彈は盡きなむとす、敵の苦痛や思ふべし。あゝ眞に寡は衆に敵し難し、本隊より分たれたる一隊は敵の左方の丘陵に攀ぢて激しき側面瞰射を

始めたり、敵や窮せざる能はざるなり、窮鼠却つて猫を噛むと果して敵は肉迫し來るべき乎。否々敵は今や其の力さへもなく、周章第二丘に退き去るの止むを得ざるに至れり。勝に誇れる本隊は長蛇の如き其の陣の兩翼を進めて敵を包圍せむとし、砲火は一分一分其の勢ひを加へたり。忽ち聞く喇叭の聲、長蛇の陣は銃劍を振りかざして襲ひかゝれり。敵は爲めに塵殺せられむとす、危機眞に一髪。俄然一聲の喇叭長く長く響き渡れり、あゝこれ休戦の令。時は午後二時をすぐること約三十分、彼方の峯より來れる風、松の梢に妙なる琴をかなでゝ颯と吹き渡れば、硝煙見る見る此方の谷に下りて、十歩に近き敵味方、思はず微笑をぞ洩しける。寶達嶺には白雲搖曳して天津乙女を乗せたらむが如く、嶺の裾ゆるうのびたるあたり水清き河北の湖には、白帆の影靜かにして水禽の姿おもしろ

し。

○歸 校

戦終れば敵も味方もなし、喜色満面に溢れたる我軍は軍歌の聲も勇ましく、北陸街道によりて午後四時、古城のもとなる親しき我校に歸りたり。

静勝館前の廣場に大隊長兵を閲し、本日の演習に對して簡單なる講評を述べべき旨を告ぐ其言に曰く、「本日の演習に於て各隊の行動敏捷なりしは満足の至りなり。特に本隊に屬せし第三中隊の一部(仮設中隊)が其勞を惜まず遙か離れたる右方の丘陵に登り迂回運動としての機を失はざりし如きは能く其任務を盡せるものといふへし更に行軍全体の上より之を見れば、病氣の爲め隊列を離れしもの一兩名に過ぎず其他取り上げて云ふべき程の出来事もあらざりしかば、本回の行軍は好成績に終るを得たりと謂ひて

不可なし」と。

然れども演習後動もすれば疲勞の狀を顯はせる者ありしは甚だ遺憾とする所なり、何となれば元來此等の事に耐ふるを以て實際の目的とするものなればなり。今後は充分の奮勵あらんとを希望す。」大隊長の講評終るや今井統監進み出で衆に告げて曰く、「今回の行軍は天候甚だ良ろしからず從つて其成績如何と懸念せしに、前後二回の演習も好良に行はれ、落伍者も甚だ少數にして、大體の上に於て好成績を得たるは甚だ満足に思ふ所なり。唯遺憾とする所は全校生徒員數六百の中從軍者五百名を得べき豫定の所實際從軍者は四百名にすぎずして豫定數との間に一百名の差を生じたるにあり、其理由に關しては大に考究する所あるべし、萬一風評の如く、不參者の幾分が行軍先の如何によりて從軍を見合せたりとせば、其人々は行軍をば一種の遊山と考ふる徒

にして心得違の甚だしき者と謂ふべし。最後に軍を解くに方り各員が各其本分を盡し、ことを感謝し併せて今後一層の精勵あらむとを希望す」と、

是に於て軍は解かれたり。晚鴉は城頭の森に峙を尋ねて歸り、我等は書窓の案に家信を期して去る。

(春雨記)

寒 下 曲

三 戌 漁 陽 再 度 遼
 辟 弓 在 臂 箭 橫 腰
 匈 奴 似 欲 知 名 姓
 休 傍 陰 山 更 射 鵬
 朔 雪 飄 飄 開 鴈 門
 平 沙 歷 亂 捲 蓬 根
 功名耻計擒生數
 直斬樓蘭報國恩

第七回春季水上
大運動會記事

地、北方に偏せりといふ勿れ、仰げば雪嶺峨々として蒼冥に聳ゆるあり、俯せば北海怒號して巖に碎くるあり、以て崇高の氣を養ひ、以て雄大の神を養ふに足らむ。天既に與ふるに此の偉大なる自然を以てす、蟄居籠城は豈に之に報ゆる道ならむや。

端艇「敷島」「端穗」「蘆原」は、あるは河北湖上に月を碎きあるは日本海上に怒濤を蹴つて、聊か我半千の健兒が平生鬱勃の氣を慰め得たりき。

されども寄る年波を如何せむ、河北湖上の一周日本海上の遠漕、今や漸く彼等の任に堪へざらむとす、あゝ悲しき哉。彼等が吾人に盡せる多大なる誠意は吾人が滿腔の熱情を以て感謝せむと欲する所なるに、更に一層の感謝を拂ふべき

事こゝにあり、そは今や漸く其任に堪へざるを悟れる彼等は吾人に與ふるに其後繼者を以てせることなり。是に於てか吾人は三老の外に青春の血燃ゆるばかりなる三子を得たり、湖上の一周海上の遠漕、今より彼等を煩はすことを得む、あゝ喜ばしき哉。

苗代には緑の色漸く鮮かに、田にはすきかふ人の鄙歌節おかしく聞ゆる頃、我北辰會は大野河上に競漕會を催して健兒が平生修練の腕前をあらはすを例となす。此年五月十七日亦これを行ふ。

從來河の左岸なる一小支流に沿ひて艇庫を設けありしも、新艇の造設を見たと地所の甚た便ならざるによりて、新に大野川の右岸に宏大なる艇庫を造り其上を露臺となせり。今會場の有様を見るに新艇庫の露臺はめぐらすに校幕を以てし飾るに各國々旗を以てせり。此處に立ち

て見れば決勝線はいふに及ばず六百米突の上流に設けたる出發点をも明かに見るを得べく、更に眼を遠く放てば石川の野の開くる彼方、連山の奥に白嶽の崇高なる姿を仰ぎ得べし。露臺と相對して左岸に時習寮の休憩所あり、校幕旗等の飾り付け整ひてよし。

午前九時第一回競漕を初む。樂隊は囀哨の樂を奏して漕手を慰め、露臺の上兩岸の邊漸く人を以て充たされむとす。

第一回 諸般の準備整ひ白赤青の三艇靜かに出發点に向へり。當日廿余回の競漕今やこの三番更によりて其幕を開かむとし殊に艇は悉く新造のものなれば、其結果如何にと人々眼を凝らして見る。此競漕をして天晴三番更の名に叶はせむとは觀者の等しく願ふ所なりしも、そは無駄なりき。白青は其の力を盡したれども亦是美事左岸芦荻の間に其首を突き込みぬ。勝は青の手

に歸しぬ。(舵手高英二郎、整調村山威士、五番矢口長三、四番山川、三番下平尙、二番清水徳太郎、艇舳松橋紋三)

第二回 白勝つ。(川越、水谷鉄次郎、石田濟、錦木徳二、菊池正三、安部良吉、加藤周藏)

第三回 青勝利を得たり。(石井、野田勢次郎、高松謙、栗本快一、三輪準次郎、倉賀野晋、市川茂三郎)

第四回 航路赤一白二青三。出發点を去ると約五十米突にして赤青共に白の航路を奪はむとす、赤は望の如く白の航路を奪ひしが艇首を左岸に曲げすぎたるにや忽ち白の衝く所となり愈

右岸に轉じ安らかに漕き去り勝を得たり。(小倉文彦、坂田清造、木村敬義、關格之助、盛賢藏、大田原清美、白井清)

第五回 航路白一青二赤三。四百米突に至り變

じて赤一白二青三の航路をとる、青白將に相觸れむとして僅に免れ、未だ決勝線に至らざるこ

と十數米突三艇相並んでこゝに死力を盡せり。

白甚だ優勢にして青の舳は白の舳を衝かむとするに至り、決勝線に入らむには僅に三艇身半を餘すのみ、是に於てか白の勝利は確なり審判係

白旗を手にして立たむとす。俄然白は舳を左岸に曲げ青は其腹を衝けり、審判係倉皇赤旗を翻

へす、蓋し白の舵手誤つてこゝに至れる也。垂成の功をして一簣を獲ざらしめたりとは夫れ此

の謂乎。(原田芳實、松井太郎、藤崎勝三郎、荒

見多三、山本熊一、安倍邦衛、浦井鏗三)

第六回 四百米突に至る迄三艇並進して敢て魁し得る者あらざりしに、約三百五十米突に達せる頃赤白共に疲れ青獨り猛く、勝は難なく青に歸しぬ。(下村茂、金尾惟敏、小林退藏、矢澤、上野意純、高澤壽、淺見)

第七回 並進せる三艇四百米突に至るや青大に

疲色あり遂に自ら競漕を脱しぬ、何等の卑怯ぞ。之に反して白赤は必死の力を奮ひて互に降らす、五百米突に至り赤小しく敵を抜く、白之を見るに奮勵一番猪進すると百米突、遂は敵を破れり。(服田美濃吉、伊地知光朗、川越篤、渡邊周、淺田、藤田兵一、栗野)

第八回 艇路赤一白二青三、二百米突に至り白は赤の航路を奪へり。白赤の二艇既に四百米突を越えたるに青は之に後るゝこと約七十米突、且つ大に疲勞の跡ありて到底勝負を争ふに足らず。さきに赤の艇路を奪ひたる白は常に赤を制しつゝ五百米突に至り赤を抜くこと三艇身に及べり、此距離を保ちて決勝線に入る。(南達吉、佐藤逸策、岩本秀雄、斐衣清香、加藤虎之助、大串榮太郎、小川長春)

第九回 白は出發點に至れるも何故か競漕に加はらざりき、赤は青を抜くと三艇身にして勝てり。(今井喜代志、菊池信次、伊藤直、宮長平作、飯田房次、西、渡邊轡)

第十回 何等の異觀なし、勝てる者は赤。(福田野田勢次郎、寺島、大澤、三輪準次郎、古道秀、山中巍)

第十一回 航路青一白二赤三、三百米突に至りて赤は白の航路を奪ふ、時に青は後るゝと五十米突勝敗は赤白の二艘に於て見るべかりき。然るに二艇が採れる航路は左岸に近寄りすぎて遂には共に權の手を留めざるべからざるに至れり。僥倖の手は先に見捨てられたる如き觀ありし青をして勝たしめぬ。(笠原由大夫、竹内六藏、山本熊一、下平尙、高澤、秋山賢二、横山芳松)

第十二回 航路を取ると白は一赤は二青は三、最初より白最も優勢、百五十米突を過ぐる頃既に第二の航路に乗り爾來眞直に猛進せり、赤は

百米突に於て青との接觸を恐れ急に右方に轉せむとせしに、舵の力強きにすぎたりけむ艇は川を横ぎると分時遂に殿を勤むるに至れり。赤の青に後るゝと十米突、青の白に後るゝと亦十米突、(高松博、横田彌吉、島津眞、荒見多三、藤島兼道、渡邊清、大和田信吉)

第十三回 三艇相前後して殆んど同一航路を走り青の勝。(政野梅吉、南達吉、和田、栗本快一、畑久一、倉賀野晋、内山俊太郎)

第十四回 二百米突をすぎて赤力抜けてまた漕かず。四百米突をすぎて青少しく力抜けたるを見て取りたる白は、今こそ青を乗り越えくれむと奮勵せしもあはれ其甲斐なかりき、審判係の翻せる旗は青。(野村聿郎、高松謙、川越、村山、中田、宮崎、久保田吉律)

番外時習察生競漕 航路白一赤二青三、漕ぎ出してより百米突の間は三艘其舳を並べたりし

に、二百米突に近きて赤は何思ひてか白に近寄り來り更に轉するや三百米突に於て青に觸れむとせり。赤は斯く迂回せる路を採りしも其勢は中々悔るべからず、四百米突に於て三艇再び並びたり。白大に力を増したれども五百米突に至る迄に二艇身の差を以て青に後れたり、五百米突を越えてより青漸々力を失へるに、反し白の氣力はすさまじく遂に勝利を占め得たり。白の青を抜くと約半艇身、拍手の音響き渡る。(長部文三、園田三郎、栗本瀨兵衛、奥田、石田濟、野田勢次郎、藤井)

競漕を終りては敵も味方もなし、賞として得たる菓子の大箱を開きて寮生一同歡を分つ。

第十五回 航路赤一白二青三、三艇の力ほど相等しく何れを兄とし何れを弟とし難く見えたり。三百米突より四百米突に至る間は左岸甚だしく突出して之に近づける者は多く敗を取れる

が如し、今青之を氣遣ひてか迂回しすぎたれば、惜い哉他の二艇に後るゝこの止むを得ざるに至りぬ。次第に他を制しつゝありし白は四百米突に達して大に敵を抜く所ありしが、五百米突をすぐる頃赤急に優勢を示し、果ては半艇身の差を以て白を壓倒し終りぬ。最後の五十米突に於ける白赤の龍争虎鬪眞に壯觀！ 拍手の響歡呼の聲ぞよみ渡る。(盛賢藏、井上相如、原恭造、大澤次三郎、今井熊次郎、阿部好視、小林退藏) 第十六回職員競漕 教壇の上白墨の粉を呼吸して書を講じ理を探るばかりが能事にもあらずとや思召しけむ、緑野の一角、塲を限りて球を飛ばし給ふと幾十句、頃其技の大に見るべきものあるに至れり。然れども望蜀は人間の常、更に其力を水上にためさむとの野心禁じ難く二里の道を遠しともせず、競漕前大野川に舟を浮べられしと既に數度に及びぬ 今や其練習の効を驗

すべき時は來れり、誰か之を看過する者あらむや。既に艇は艤せられ衆は之を送るに拍手を以てす。やがて白は一赤は二青は三の航路を占め終れば一發の號砲轟きぬ。未だ百米突を越えざる中に三艇首を鳩めて何事をか談せむとせり、既にして相別るゝや各々其航路を轉じて青一白二赤三となれり。相談は何事なりしか知らねども、白と赤とはもつれゝて仲善く下るに、獨り魁の功名を占めむと勉めたる青ぞつれなき。(中俣匡、藤井國弘、竹田留次郎、日下庄太郎、森内政昌、田中鉄吉、赤尾直松) 第十七回 三艇共に斯道の勇士に満ちたるに、其勝負の見榮え無かりしは何事ぞ。三の航路にありし青が三百米突の線に入りて白赤の後方を過りて右岸に出でたるが如き怪事を見たるのみにして何等の奇觀なく、殊に白の勝つと四艇身許に及べるが如きに至りては何人も不思議とせ

ざるを得さりき。(中山又八、河原繁、増田俊一、松橋好次郎、田邊駿男、岡本)

第十八回 六百米突の間を三艇開きては閉ぢ閉ぢては開くと兩三回、勝は青。(下村茂、久田、高萩節、小山田彌三郎、藤澤廉之助、見間芳郎、山田繁郎)

第十九回來賓競漕 一専門校二中學の職員を招きて各一艇に陣取らしめ、茲に當日の物種なる來賓競漕は行はれたり。金澤醫學専門學校は艇白航路三、石川縣立第一中學校は艇青航路一、同第二中學校は艇赤航路二。専門はやゝ眞直に航したるも一中二中は共に左岸に近寄り中にも二中は二百五十米突の邊にて専門と將に觸れむとし周章其舵を轉するや一中に衝き當らむとせり。既にして専門一中の二艇は二中を抜くと一艇身余なるに二中は調子を亂すと甚だしく、其歩むや牛の如く三百米突に至り遂に中止せり。

四百米突に於て専門やゝ優勢を示したるに五百米突に達して一中少しく専門を抜く、専門の士奮發の期は今此處と思ひけむ、満身の力を鼓して猛漕一番、五百五十米突に於て再び一中を制し得たり。然れども四百米突以來次第次第に近寄り來れる二艇は不幸にもこゝに接觸の厄を見、オールとオールとは相結びて爲めに離れ難きに至れり。今や決勝線を去ると僅に二三艇身なれば、もがくとの力強き方は辛くも勝者たり得べし、二艇が狼狽苦悶する狀恰も舟に取り付かむとする溺者に似たり。應援の聲歡笑の響兩岸に喧しく、一中苦しくももがき勝てり。(小原淺生、山本、佐々木、庄司、船岡、安田) 第二十回 決勝線に白旗翻へれる時、青は白に後るゝと約五十米突、赤は更に青に後るゝと其半。(長部文三、園田三郎、石井光雄、竹尾秋助、中大路氏爲、秋山謙次、澤靜夫)

第廿一回 赤勝つ、(増田雷助、安藤徳男、藤井正太郎、吉田孫作、仲佐貞次郎、宮下、神保金衛) 俄然號砲一發白旗は高く翻へれり。瞬間、其瞬間、歡呼の叫拍手の響再び起りぬ、岸の上より、舟の中より。二艇の差僅に寸餘、白の得意想ふべく、青の無念察すべし。(中野友男、檜田太郎、山田修作、安江正城、中川善松、山本直枝、眞に當日の偉觀。既に航程の半をすぐるや三艇等しく猛漕に猛漕を加へ来る、四百米突に於て赤何故か自ら線外に脱し青白の二龍玉を争ふべくなりぬ、四百米突以來白先んせむとすれば青之を制し青抜かむとすれば白之を遮りたる勇ましき武者振は人をして警嘆措く能はざらしめ、殊に舳を揃へたる兩艇が最後一百米突間に於ける奮闘の狀に至りては吾人をして記載するの好辭無きに苦ましめたり。一分一分決勝線は近づけり。十米突、五米突、まつた一米突。騒しかりし觀衆の呼聲も今は閉塞して、見渡す限りし

はぶきも聞えず。勝つ者は孰ぞ、青か。白か。俄然號砲一發白旗は高く翻へれり。瞬間、其瞬間、歡呼の叫拍手の響再び起りぬ、岸の上より、舟の中より。二艇の差僅に寸餘、白の得意想ふべく、青の無念察すべし。(中野友男、檜田太郎、山田修作、安江正城、中川善松、山本直枝、矢部潤二)

第廿三回 三艇入り亂れて戦へると今回の如きは無かりき、蓋し入れ亂るといふとも奮戦したる謂に非ず。若し三艇が取れる航路の跡を知らむと欲せば、宜しく中風患者を雇ひ來りて紙上の一端より他の一端に三線を引かしむるに若かず。勝てる者はあり則ち白。(横山要三、大竹勇、丸山緑、原田、得能佳吉、吉田、下平)

絶え間なく行ひ來れる競漕こゝに至りて廿三回の多きに及びぬ。僅かに一回出漕して勝利を得たる者あるかと見れば。數回出漕して而かも敗

軍に終れる者もあり。たゞこれ競漕場裡の小事の如くなれども、之を見て少なからざる興味を感ずるは、吾人が前途に横ふる所謂世間も亦斯の如からむと思へばなり。

時に午後四時四十分、新造端艇命名式及新築艇庫落成式を新艇庫の西側廣場に於て舉行す、詳しくは項を改めてしるさむ。

例によれば競漕當日最後の活劇として、各部選手競漕を行ふべきなれども、本年は種々込み入りたる事情ありしが爲め、遂に改めて一部二部三部夫々自己の部のみにて選手競漕を行ふことなれり。

第廿四回 一部選手競漕 日は漸く傾きぬ、微風海より吹き來りて勇ましき漕手の門出を送る、待つと數分一條の白煙銃口より進り三艇等しく漕き出せり。少しく後れたる白は百米突に至りて之を恢復しぬ。舵手は巧に其舵を操り一漕は

一漕より其勢を加へて將に一大競漕を見むとせり、俄然赤が取りたる第一航路の上に和船一隻を見る。牛歩に似たる和船と天馬空を驅けるが如き赤艇とは何事かを惹起せざるべからざるなり、果然赤艇は和船を衝いて將に之を覆らしめむとせり。かゝる間にも青白の二艇は少しもたゆまざりしかば、見る／＼百米突を抜いて驅け去りぬ、あゝ好競漕は遂に一和船の爲めに之を見るに能はざるに至れり、霸氣勃々たる赤の無念は言ふも更なり觀衆の遺憾之を以て今日の極となす。吾人は河川を私せむとするものに非ず、之を私せざると共にまた吾人の喜戯を妨害せられざらむとを希ひ更に此の如きは何人も之を承認するに吝ならざるべしと確く信じて疑はざる也。然り無智の船夫も猶我か意を了解し勉めて我が妨害をなさざらむとを期せり、而して何ぞ計らむ彼の如き無禮漢表はれむとは、吾人は本

郎、河原繁、安部成廉、松橋好治郎、西成伍、龜川兼吉、木子七郎)

第廿六回 三部選手競漕 金波は消えて 跡形も無

相接して競ひ來り、審判係青旗を打ちふりぬ。

正太郎、星政一、桑原政榮

せられ 湖は一面にくろみ渡れり。さきの騷擾

今はた何處にか求めむ、唯聽く靄中欸乃の聲

五
五
五
五
五

✕ ✕ ✕ ✕ ✕

迄も無く此漕艇の運動が盛大を來すべきは疑ふべからざるをならむ、余は會員諸君が勉學の餘暇此運動に従事して其身林を練磨し其心

情を快活にせむとを熱望す但し一利一害は數
の免れ難き所なれば此運動に於ても此弊に陷
らざる様各自注意あらむとを乞ふ

是に於て會長は中目漕艇部長に新艇命名書を渡す、新艇の名左の如し

曰く、千鳥（ちどり）

曰く、隼（はやぶさ）

曰く、雁（かりがね）

次に今井委員長工事報告をなす、報告せる所左の如し、

端艇新造

明治三十五年十二月十九日起工

同 三十六年四月三十日竣工

工事委員 藤井國弘君 佐和貞柏君

工 費 金七百拾參圓貳拾八錢四厘也
請負人 田村幸太郎氏

艇庫新築

明治三十六年三月十七日起工

同 五月十六日竣工

工事委員 竹田留次郎君 安部成廉君

地上權買取費 金九拾貳圓也

工 費 金壹千參拾七圓七拾錢也

請負人 田村幸太郎氏

報告終るや中目漕艇部長述ぶる所あり、曰く、

私は漕艇部長としてこゝに一言する所あるを
光榮とす、端艇新造艇庫新築に關して吾人の
忘るべからざる事二あり、其一は會員諸君の
熱誠にして他の一は工事委員藤井氏竹田氏が
親しく工事監督の勞を執られ爲めに大野町に
出張せられし日數實に數ふべからざる程なり
しとなり、希くは諸君は兩氏が斯く迄盡力せ

られたる事をして空しからしむる勿れ
次に會員總代出で祝辭を朗讀す、

端艇新に成り爰に命名式を舉行するに至る吾
人の狂喜何ぞ極まらむや由來吾校の端艇部は
設立以來既に七星霜而かも其發達の跡見る可
きものなく却つて衰頹の域に赴くに非ざるな
きかを疑はしむこれ吾人が常に憤憂して措く
能はざる所なりき回顧すれば明治三十年の交
我端艇部の裝置が未だ今日の如く整頓せざり
し時に當つて先輩諸兄が蹶起勇躍遙に檄を飛
ばして第二高等學校の勇士と雌雄を墨沱江上
に決せむとせし壯舉は不幸にして中止するの
止む能はざるに至りしと雖も而かも當時に於
ける先輩諸兄の氣慨と熱誠とに至りては寔に
敬服すべきものなりしなり嗚呼先輩の士は斯
の如きの時に際して猶斯の如きの意氣ありき
今や三艘の新艇は成り加ふるに艇庫の改造せ

らるゝありて斯道の完備を致し殆んど間然す
る所なきに至れり況んや河北湖上の金波を漕
亂して瀟灑の襟懷を養ひ北海の怒濤を踏破し
て豪宕の氣風を盛ならしむる至便あるに於て
わや吾人會員たる者は是よりして眞摯事に從
ひ斯道の精神を發揮して益々其進歩發達を企
圖すべし聊か蕪辭を陳して祝詞となす

明治三十六年五月十七日

第四高等學校北辰會員總代

園 田 三 郎

これを終りて工事請負人田村幸太郎氏の勞を慰
せむとて酒肴料若干を同氏に贈る、
斯の如くして式は終れり、會員諸子の頬に微笑
の浮ぶも嬉し、





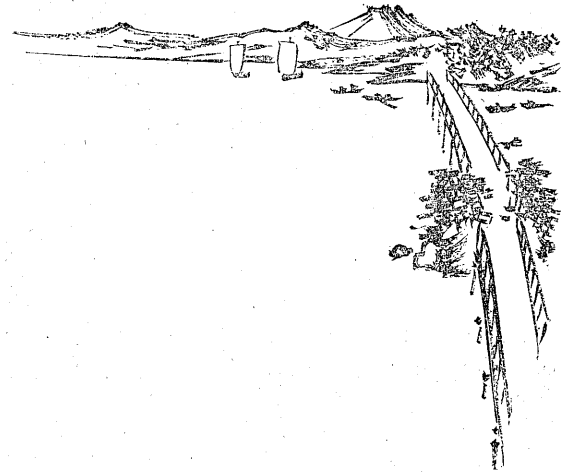
謝 辭

生等不敏を顧みず叨りに大任を汚し日夜責を盡し得ざるを
憂慮す、今や新艇艇庫工を竣え、本部漸く完成の域に達せむと
す、これ一に熱誠ある校友諸君の賛同による所なり、希くは生
等を鞭撻指導して厚志の幾分に報ゆるを得せしめられんこ
とを

端艇部委員

高	小	堀	安	園	増
安	倉		部	田	田
愼	文	將	成	三	俊
一	彦	之	廉	郎	一

明治三十六年五月十七日



投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ

一 雜誌上には雅號のみを記載するを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論じ或は德義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十六年六月十五日印刷

明治三十六年六月十八日發行

編輯兼發行者

吉村政行

印刷者

生沼倍男

印刷所

明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校校友會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁二十九番地

同縣同市高岡町九十番地

